

# 林 田 遺 跡 Ⅱ

緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書

2002年 10月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



# 序

林田遺跡のある土佐山田町は、高知県下でも有数の遺跡の集中するところであり、林田遺跡の北東には、弥生時代の壺がそのまま鍾乳石に覆われていることで知られている龍河洞遺跡があり、物部川を挟んで対岸には林田遺跡と同時代のひびのき遺跡やひびのきサウジ遺跡が存在しています。また北部の山麓には古墳群や古代の古窯跡が数多く残されています。このような遺跡の存在は、物部川によって生まれた当地の安定した気候風土が、私たちの祖先に豊かな生活の場を提供してきたことの何よりの証しだと思います。

林田遺跡は、過去、昭和58年と平成11年とに2回調査が行なわれてまいりました。今回を含めて3度目の調査になり、弥生時代後期～古墳初頭の竪穴住居の検出を合計すると19棟確認できました。物部川左岸は、右岸に較べると調査例の少ないところであり、流域の歴史に新たな1ページを加えることができました。

埋蔵文化財は私たちの祖先の営みの今日に伝える掛け替えのない文化遺産であると共に地域の歴史を復元していく為の貴重な歴史資料であります。地域の現在と未来の豊かな発展のためには、地域の土台であるその歴史を知ることからはじめなければならないと思います。

本報告書が、地域の歴史資料として、また斯学の向上に寄与することができれば、この上ない喜びであります。今後とも埋蔵文化財に対しまして一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に炎天下、現地調査に携わって下さいました多くの方々ならびに整理作業員の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年10月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所 長 島 内 靖



## 例 言

- 1 本書は、県道宮ノ口～深淵線道路改築に伴う林田遺跡発掘調査報告書Ⅱである。
- 2 本書は林田遺跡Ⅲ区(1,000m<sup>2</sup>)の報告書である。  
林田遺跡の調査区はⅠ区(1,200m<sup>2</sup>)、Ⅱ区(800m<sup>2</sup>)、Ⅲ区(1,000m<sup>2</sup>)に分かれており、  
Ⅰ区とⅡ区の調査を平成11年度に、Ⅲ区の調査を12年度に実施した。平成13年度の事業としてⅠ・Ⅱ区の報告書を林田遺跡Ⅰとして刊行している。
- 3 本書の編集及び執筆は出原恵三が行った。
- 4 調査は、高知県南国土木事務所から委託を受けて(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 調査期間  
平成12年7月26日～9月19日
- 6 調査面積  
Ⅲ区(1,000m<sup>2</sup>)
- 7 調査体制  
調査担当 調査員 出原恵三(財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター調査課第3班長)  
同 小嶋博満(同 専門調査員)  
総務担当 中条英人(財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター総務課主幹)
- 8 方位Nは、公共座標によるGNである。
- 9 現場作業及び整理作業には下記の方々に従事して頂いた  
現場作業員：田代勝 楠瀬正人 小松弼 大和田延子 岡村富恵子 河村美佐子 島崎達也  
堀川里望 山崎真治 田村亘章 吉川誠喜 吉川徳子  
整理作業員：松木富子 浜田雅代 山口知子
- 10 本書作製にあたり、当センター山本純代氏の助力を得た。記して深く感謝申し上げます。
- 11 出土遺物については「00-8TH」と注記し関連図面・写真と共に(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境 .....	1
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第Ⅱ章 調査に至る経過及び調査の概要 .....	6
1 調査に至る経過	
2 調査の方法と調査の概要	
第Ⅲ章 調査の成果 .....	11
1 基本層序	
2 検出遺構と遺物	
(1)弥生時代の遺構と遺物	
(2)古代以降の遺構と遺物	
(3)包含層出土の遺物	
第Ⅳ章 考察 竪穴住居の廃絶について .....	29
第Ⅴ章 まとめ .....	38

# 挿図目次

- Fig. 1 : 土佐山田町位置図
- Fig. 2 : 林田遺跡周辺の遺跡分布図
- Fig. 3 : 調査区位置図 1
- Fig. 4 : 調査区位置図 2
- Fig. 5 : 検出遺構全体図
- Fig. 6 : 調査区北壁セクション
- Fig. 7 : ST 1 平面・セクション・出土遺物実測図
- Fig. 8 : ST 2 平面・セクション・出土遺物実測図
- Fig. 9 : ST 3 平面・セクション・出土遺物実測図
- Fig.10 : ST 3 出土遺物実測図
- Fig.11 : ST 4 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.12 : ST 4 集石・土器検出状況
- Fig.13 : ST 4 出土遺物実測図 1
- Fig.14 : ST 4 出土遺物実測図 2
- Fig.15 : ST 4 出土遺物実測図 3
- Fig.16 : ST 4 出土遺物実測図 4
- Fig.17 : 土坑平面・セクション・エレベーション図
- Fig.18 : 土坑平面・セクション・エレベーション図
- Fig.19 : 土坑・ピット出土遺物実測図
- Fig.20 : P 83・包含層出土遺物実測図
- Fig.21 : ヤリガンナ、釘、鉄片、ガラス玉実測図
- Fig.22 : 小籠遺跡竪穴住居址分布図及びST 17・13平面、セクション図
- Fig.23 : 東崎遺跡竪穴住居址分布図及びST 1・5～7平面、セクション図
- Fig.24 : ひびのきサウジ遺跡竪穴住居分布図・ST 8 平面図及び西分増井遺跡竪穴住居分布図
- Fig.25 : 林田遺跡・田村遺跡・金地遺跡・下ノ坪遺跡の竪穴住居平面図

# 図版目次

- PL 1 : 調査前の状況(北から)、遺構完掘状況(北から)
- PL 2 : ST 1 遺物出土状況(西から)、同上(南から)
- PL 3 : ST 1 中央ピット検出面上の集石、ST 1 完掘状況(西から)
- PL 4 : ST 3 遺物出土状況(東から)、同上(南から)
- PL 5 : ST 3 完掘状況(東から)、ST 3 中央ピット
- PL 6 : ST 3 -P 1 半截、同上 完掘
- PL 7 : ST 4 セクション、同上 集石(東から)
- PL 8 : ST 4 集石(南から)、同上
- PL 9 : ST 4 集石(南から)、ST 4 完掘状況(南から)
- PL10 : SK 1 完掘状況(南から)、SK 4 (西から)
- PL11 : SK 3 (西から)、SK 7 (南から)
- PL12 : ST10半截状況、同上 礫・炭化物出土状況
- PL13 : SK10礫・炭化物出土状況、SK10完掘状況
- PL14 : P 6 遺物出土状況、調査区東壁セクション
- PL15 : ST 4 床面出土土器、ST 4 床面出土土器、SK10炭化物(板接合部)、SK10六道銭、土師器小皿出土状況、土師器椀出土状況
- PL16 : 竪穴住居址出土の土器
- PL17 : ST 4 集石・床出土土器
- PL18 : ST 1、ST 2、ST 3、ST 4、P 6、包含層出土土器
- PL19 : ST 4 出土土器・SK 1・SK10・ST 4・P 6 出土鉄器
- PL20 : 古代・中世の土器、同上



# 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

## 1 地理的環境

林田遺跡の所在する土佐山田町林田及び加茂は、一級河川物部川左岸に形成された低位段丘上にある。遺跡の標高は52m前後を測り、沖積平野面との比高差は15mである。物部川河口からは12km上流に位置する。物部川は、中・上流域において大小の河岸段丘を形成しながら流れ、神母木付近から川幅を増しながら太平洋に注いでいる。下流域では、扇状地や自然堤防が発達し南四国最大の穀倉地帯である香長平野の主要部分を形成するが、林田遺跡は香長平野の広がる要の位置に立地している。林田遺跡の載っている段丘は、杉田付近から南に向かって広がる低位段丘の南端部に位置し、遺跡の北側を流れる空谷川によって隔されている。この種の段丘は右岸側においてさらに広く展開しており、南国市後免付近の長岡台地へと続く。土佐山田町から南国市に広がる香長平野は、各時代を通して県下でも最も遺跡の多く分布する地域である。

## 2 歴史的環境

### 旧石器・縄文時代

周辺部における旧石器時代の遺跡は僅少であり発掘調査の例はない。その中で右岸の中位段丘にある佐野楠目山遺跡からは角錐状石器が十数点採集されており最も有望視されている。この他に中流域の香北町永野南岡遺跡において旧石器の可能性のある石器が採集されている。県中央部に視野を広げれば、南国市の奥谷南遺跡からナイフ形石器など質・量ともに良好な資料が得られ注目すべき成果を挙げている<sup>(1)</sup>。

縄文時代の遺跡は、県西部の海岸段丘や四万十川流域に数多く分布しており、物部川流域を含む



Fig.1 土佐山田町位置図

中央部は分布密度の稀薄な地域とされてきた。しかしながら近年では、香長平野においても新たな遺跡の発見例が増えつつある。草創期の事例は僅少であるが、奥谷南遺跡から隆帯文土器や尖頭器などが出土し注目を集めている。早期になると物部川の低位段丘に点在し始めるが、現状では左岸のみに分布しており右岸においては未確認である。中流域の香北町美良布遺跡<sup>(2)</sup>からは僅少ながら厚手無文土器が出土しており、同じく中流域の太郎丸遺跡からは黄島式土器が比較的まとまって出土している。この他、下流域左岸の町田堰遺跡からも押形文土器が採集されている。続く前期の遺跡は、物部川流域の段丘からは発見されておらず、奥谷南遺跡<sup>(3)</sup>や栄エ田遺跡<sup>(4)</sup>など香長平野北端の山麓部から少量の土器が出土しているに過ぎない。中期の遺跡も少ないが、林田シタノジ遺跡<sup>(5)</sup>から土坑に伴って中期末葉の土器が出土しており、下流域では田村遺跡から船元式土器が出土している。また奥谷南遺跡からは中期末葉と考えられる貯蔵穴が7基検出されている<sup>(3)</sup>。香長平野においては中期頃から沖積平野への遺跡の進出が開始される。

後期になると県下の遺跡の飛躍的な増加が見られるが、香長平野では田村遺跡や栄エ田遺跡、奥谷南遺跡などでまとまった遺物が出土している。田村遺跡からは後期中葉の片粕式土器とともに多量の打製石斧や石錘が出土しており<sup>(6)</sup>、最近の調査では九州の鐘崎式土器がまとまって出土するなど注目すべき成果を挙げている。晩期は美良布遺跡から中葉の八反坪式土器と同時期の土坑が数基検出されており<sup>(2)</sup>、栄エ田遺跡や林田シタノジ遺跡<sup>(5)</sup>では、晩期中葉から突帯文土器期の土器が出土している。

### 弥生時代

弥生時代になると香長平野は県下で最も遺跡が集中する。しかも時期によって分布地点に明瞭な変化が現れるなど興味深い現象が生じるのである。先ず田村遺跡群に前期初頭の集落が忽然と出現

遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 林田遺跡	縄文～中世	26 浜田遺跡	弥生	51 ひびのき遺跡	弥生・古墳	76 小山田2号墳	古墳
2 林田シタノジ遺跡	縄文～古代	27 岩坂遺跡	〃	52 ひびのきサウジ遺跡	弥生～中世	77 小山田3号墳	〃
3 宮ノ口遺跡	古墳～平安	28 里改田遺跡	弥生～中世	53 伏原遺跡	弥生～古代	78 タンガン古墳	〃
4 佐野楠目山遺跡	旧石器	29 中組遺跡	〃	54 小倉山古墳	古墳	79 植タンガン窯跡	飛鳥
5 林田1号墳	古墳	30 鹿枝遺跡	弥生～古代	55 鏡野学園前古墳	〃	80 須江上段遺跡	古墳～中世
6 林田2号墳	〃	31 関町田遺跡	弥生	56 前行1号墳	〃	81 ハザマガ遺跡	古墳～古代
7 加茂ハイタクボ遺跡	古代	32 西ノ芝遺跡	弥生～中世	57 前行2号墳	〃	82 泉ヶ内遺跡	〃
8 加茂遺跡	古墳～中世	33 乱戸遺跡	弥生～古代	58 伏原大塚古墳	〃	83 白猪田遺跡	〃
9 町田遺跡	弥生～中世	34 修理田遺跡	〃	59 西の久保古墳	〃	84 前嶋遺跡	〃
10 町田堰東遺跡	縄文～中世	35 高添遺跡	〃	60 次郎ヶ谷西古墳	〃	85 堂屋敷遺跡	弥生～古代
11 西佐古遺跡	平安・中世	36 平杭遺跡	弥生～古墳	61 田村氏古墳	〃	86 国分寺遺跡群	弥生～中世
12 深瀬北遺跡	弥生～中世	37 寺ノ前遺跡	弥生～中世	62 亀ヶ谷1号墳	〃	87 土佐国府跡	〃
13 西上野遺跡	弥生	38 横落遺跡	弥生～古代	63 亀ヶ谷2号墳	〃	88 瀬ノ上遺跡	弥生～古代
14 深瀬遺跡	縄文～中世	39 包末井ノ内遺跡	縄文～古代	64 椎山1号墳	〃	89 三阜遺跡	〃
15 西野遺跡群	弥生～古墳	40 芝田遺跡	古墳～中世	65 椎山2号墳	〃	90 三添遺跡	弥生～中世
16 東野土居遺跡	古墳・古代	41 垣添遺跡	〃	66 新改3号墳	〃	91 後藤丸遺跡	〃
17 平井遺跡	古墳～古代	42 岩村遺跡	弥生～中世	67 新改2号墳	〃	92 末松遺跡	古墳～中世
18 下ノ坪遺跡	弥生～古代	43 大領遺跡	〃	68 須恵塚穴古墳	〃	93 米屋の東遺跡	〃
19 北地遺跡	弥生	44 野村丸遺跡	弥生～古代	69 西ノ内1号墳	〃	94 辺路石南遺跡	古墳・中世
20 高田遺跡	古代	45 金地遺跡	弥生～中世	70 西ノ内2号墳	〃	95 土島田遺跡	弥生～中世
21 野口遺跡	弥生	46 黒土遺跡	弥生	71 西ノ内窯跡	〃	96 東崎遺跡	弥生～古代
22 浜口遺跡	弥生・古墳	47 原南遺跡	弥生～中世	72 東谷1号墳	〃	97 小籠遺跡	弥生～中世
23 住吉砂丘遺跡	弥生	48 原遺跡	〃	73 東谷2号墳	〃	98 若宮ノ東遺跡	〃
24 田村遺跡群	縄文～中世	49 稲荷前遺跡	〃	74 小山田1号墳	〃	99 北泉遺跡	弥生～古代
25 中屋敷遺跡	弥生	50 楠目遺跡	〃	75 新政4号墳	〃	100 大篠遺跡	弥生

表1 遺跡名一覧表



Fig.2 林田遺跡周辺の遺跡分布図

する。いわゆる松菊里型住居を含む10棟の竪穴住居と大小15棟の掘立柱建物からなる集落である。この段階で大陸系磨製石器はすべて揃っており、土器は縄文晩期土器を伴わず初期の遠賀川式土器が展開するという特徴を有している。続いて地点を変えて環濠を有する集落が営まれ、以後の発展の基礎が培われる<sup>(7)</sup>。前期末から中期中葉にかけては比較的遺構も少ないが、横線文土器が盛行しはじめる中期後葉から後期前半にかけて田村遺跡は拠点集落として盛況期を迎える。最近の調査結果によると竪穴住居400棟以上、掘立柱建物200棟以上が検出されている<sup>(8)</sup>が、これらのほとんどが後期前半に属するものである。当該期は周辺部においても集落遺跡が増加し、物部川左岸の下ノ坪遺跡<sup>(9)</sup>や上岡遺跡に後期前半を中心とする集落が営まれる。またこの時期は平野を見下ろす丘陵や山腹にも集落遺跡が出現する。奥谷南遺跡<sup>(3)</sup>や野市町の本村遺跡<sup>(10)</sup>を好例として挙げることができよう。香長平野の青銅器は、最も古い例として野市町兎田八幡宮の中細銅剣が挙げられる<sup>(11)</sup>。しかし、当地域の青銅器は、銅鐸と中広・広形銅矛が混在して分布するところに最も大きな特徴を見い出すことができる。物部川上流の物部村大柘には中広銅矛が2本、中流域の美良布神社には近畿式銅鐸2個、下流域右岸からの出土が想定されている伝香美郡出土銅鐸を挙げることができる。田村遺跡とその周辺からも近畿式1個と扁平鈕式銅鐸が1個出土しており、銅矛は中広形2本と広形6本が出土している。南四国中央部における青銅器のこのような分布は、従来のような九州と近畿の東西の対峙の象徴として位置付けるのではなく、最近では拠点集落田村遺跡に代表されるような南四国中央部の求心性の産物としての解釈が提示されている<sup>(11)</sup>。

弥生時代後期後半に至ると香長平野の集落には大きな変化が現れる。すなわち拠点集落田村遺跡が突然消滅すると共に周辺部の集落も同時し終焉を迎え、集落はそれまでほとんど集落のなかった内陸部へと移動し遺跡数が飛躍的に増加するのである。短期間に集落の再編を遂げるのである。林田遺跡の弥生後期集落はこのような背景の中で登場する。対岸のひびのき遺跡<sup>(11)</sup>やひびのきサウジ遺跡<sup>(14)</sup>、岩村遺跡<sup>(15)</sup>、金地遺跡<sup>(16)</sup>、小籠遺跡<sup>(18)</sup>、東崎遺跡<sup>(18)</sup>などを挙げることができる。さらにこれらの遺跡は多くの場合古墳時代初頭まで営まれるが、その後に継続することはほとんどなく短命な遺跡であるところに特徴がある。

#### 古墳時代以降

当地域は周知のように前期古墳の空白地帯であるが、集落址の動向と如何なる関連があるのか今後追究していくべき課題である。

当地域に古墳が登場するのは古墳時代後期からである。南国市や土佐山田町の山麓部には横穴式石室をもった大小の古墳が営まれ、県下では最も周密な分布を示している。林田遺跡の周辺にも林田1号・2号墳が築かれている。このような古墳を営んだ勢力がやがて地域の有力者層を形成するようになり政治的にも成長を遂げ、律令体制の地域支配の一翼を担うようになる。土佐における古代史の中心舞台は南国市比江とその周辺が挙げられるが、下ノ坪遺跡では官衙のような規格性を持った大型掘立柱建物群が検出されており、最近田村遺跡においても当該期の掘立柱建物群の検出が相次いでいる。このことは物部川流域が、古代においても特に水運に関連して重要な役割を果たしていたことが窺える。林田遺跡の南の加茂ハイタノクボ遺跡<sup>(19)</sup>からは讃岐の善通寺や仲村廃寺出土

と同汎の軒丸瓦が出土しており、付近には当該期の山本前田窯跡もある。これまで土佐山田町の古代史は、須江古窯址群など土佐国衙推定地周辺の西部で語られることが多かったが、林田遺跡付近は、物部川右岸に展開するもう一つの舞台として注目すべき地域である。

(註)

- 1)松村信博・山本純代「高知県奥谷南遺跡」『日本考古学年報49』日本考古学協会1996年
- 2)出原恵三『美良布遺跡』高知県香北町教育委員会1991年
- 3)松村信博・山本純代『奥谷南遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1999年
- 4)松村信博『栄エ田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- 5)山崎正明『林田シタノヂ遺跡』高知県土佐山田町教育委員会1993年
- 6)高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群』第Ⅰ分冊1986年
- 7)高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群』第Ⅱ・Ⅲ分冊1986年
- 8)財森田尚宏・小野由香『田村遺跡群発掘調査概報』2002年(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 9)小松大洋・出原恵三・池澤俊幸『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会1998年
- 10)坂本憲昭『本村遺跡』高知県野市町教育委員会1993年
- 11)岡本健児・岡本桂典「高知県香美郡野市町兔田八幡宮と絵画をもつ銅剣」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要第3号』高知県立歴史民俗資料館1993年
- 12)出原恵三「南四国の古墳時代—前期古墳成立期前後の動向を中心に—」『古代学協会四国支部第14回大会研究発表要旨集』古代学協会四国支部2000年
- 13)岡本健児『高知県ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会1977年
- 14)高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県土佐山田町教育委員会1990年
- 15)三谷民雄『岩村遺跡群Ⅳ』高知県南国市教育委員会1999年
- 16)吉原達成『金地遺跡』高知県南国市教育委員会1992年
- 17)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年
- 18)山本哲也『東崎遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団1991年
- 19)川端清司『加茂ハイタノクボ遺跡』高知県土佐山田町教育委員会2000年

## 第Ⅱ章 調査に至る経過及び調査の概要

### 1 調査に至る経過

県道宮ノ口深淵線は、土佐山田町宮ノ口と野市町深淵を結ぶ一般県道で物部川沿いの国道195号線と県道南国野市線とを結ぶ路線である。沿線には高知工科大学や中核工業団地があり、工科大等と高知空港とを結ぶ最短ルートとして整備するものである。平成9年度に工科大前の区間が部分開通しており、県道龍河洞公園線～県道神母木野市線間を平成10年度より事業化し、同15年度に農林合同庁舎付近までの部分開通に向けて事業が進められている。

11年度事業予定地の土佐山田町林田、同加茂地区には林田遺跡や林田シタノジ遺跡、山本前田窯跡、ハイタノクボ遺跡など縄文時代から古代・中世に至る遺跡が所在している。林田遺跡は昭和58年の明治地区県営圃場整備に伴う発掘調査において弥生時代後期の竪穴住居5棟を検出し、当時としては物部川左岸に展開する初めての集落例として注目された。林田シタノジ遺跡は土佐山田町では数少ない縄文時代の遺跡であり、ハイタノクボ遺跡からは古代の瓦などが検出されている。当地域は物部川中流域右岸における重要な遺跡群として位置付けることができよう。

工事が予定通り行われたならば、これら遺跡群は大きな影響を受けることになる。文化財保護部局である高知県教育委員会は、高知県南国土木事務所と協議を行い、先ず平成11年度事業工区内に入る林田遺跡については、記録保存の為の全面発掘調査を実施することとなり、以後の工事予定地内についても順次試掘調査を行うことを確認した。

11年度の発掘調査は、9月7日から11月23日まで2000m<sup>2</sup>について実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居7棟、15世紀代の大溝などを検出し、林田遺跡の規模や時期がさらに広がることが明らかとなった。今次調査は、11年度調査区のⅠ区とⅡ区の間1000m<sup>2</sup>について、平成12年6月6日～6月8日まで試掘調査を実施した。その結果、ほぼ全域から遺構、遺物が確認されたことから、対象区をⅢ区として7月26日から本調査を実施した。

### 2 調査の方法と調査の概要

圃場整備で改変された土層を重機で掘削し、遺物包含層以下は人力で掘り下げた。遺物の取上げや遺構測量については、Ⅰ・Ⅱ区と対応するように公共座標に基づいて4mメッシュを設け、南から北に向けて1・2・3・・・、東から西に向かってA・B・C・・・を付して実施した。遺構や層序の実測は20分の1縮尺を基本とし、必要によって縮尺を変えた。竪穴住居の遺物取上げについては、埋土の分層が困難であったために5～10cmの厚さの人工層位によって上から1回目、2回目・・・として取上げた。

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居4棟、土坑、近世墓、ピット等を検出した。圃場整備によって相当の削平を受けており、竪穴住居址等の残りは良好とは言えない。前回のⅢ区では竪穴住居を検出していないところから、林田遺跡の弥生時代から古墳時代初めの集落の南及び西の限りを今次調査区に求めることができよう。

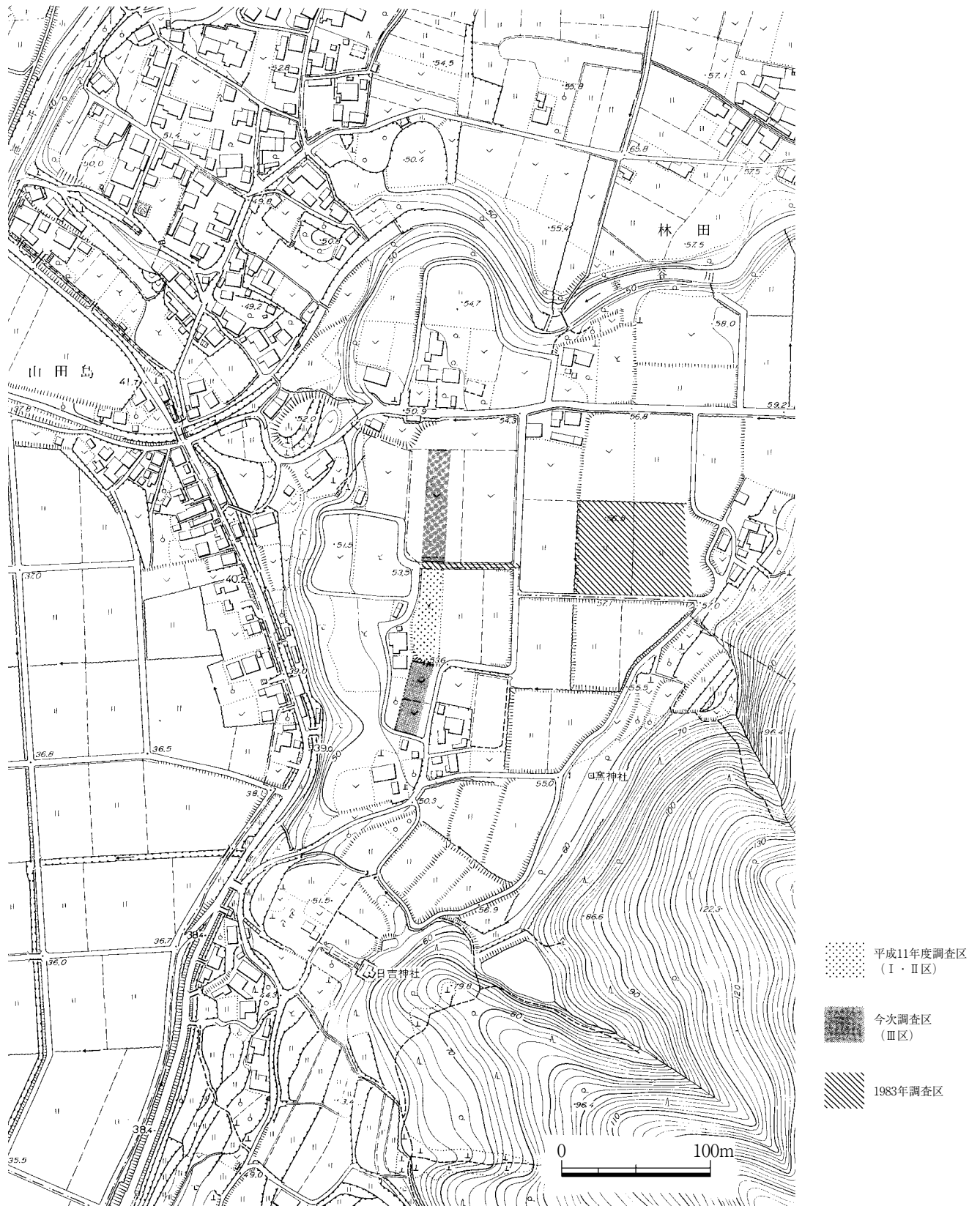


Fig.3 調査区位置図1

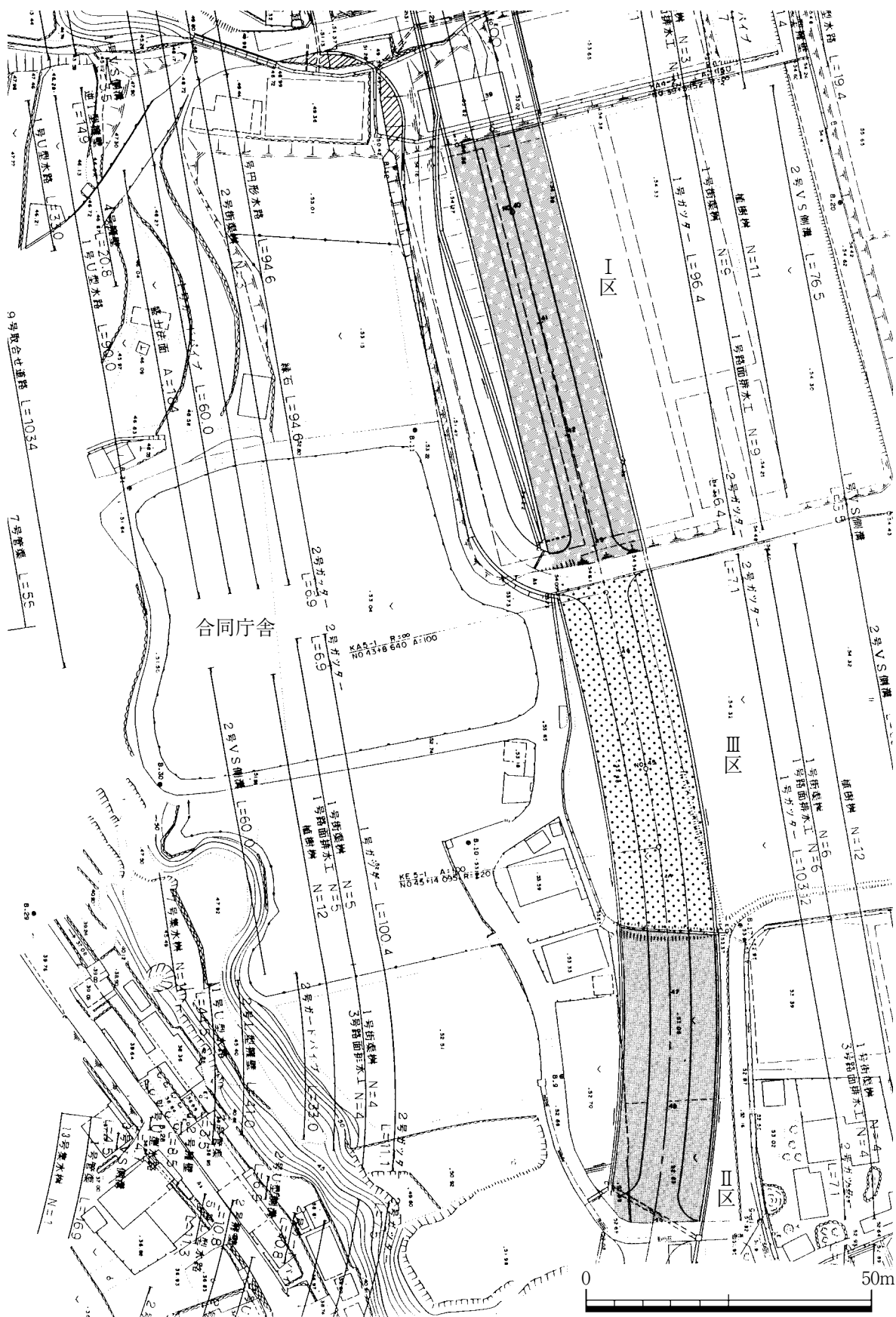


Fig.4 調査区位置図2

(1:1000)



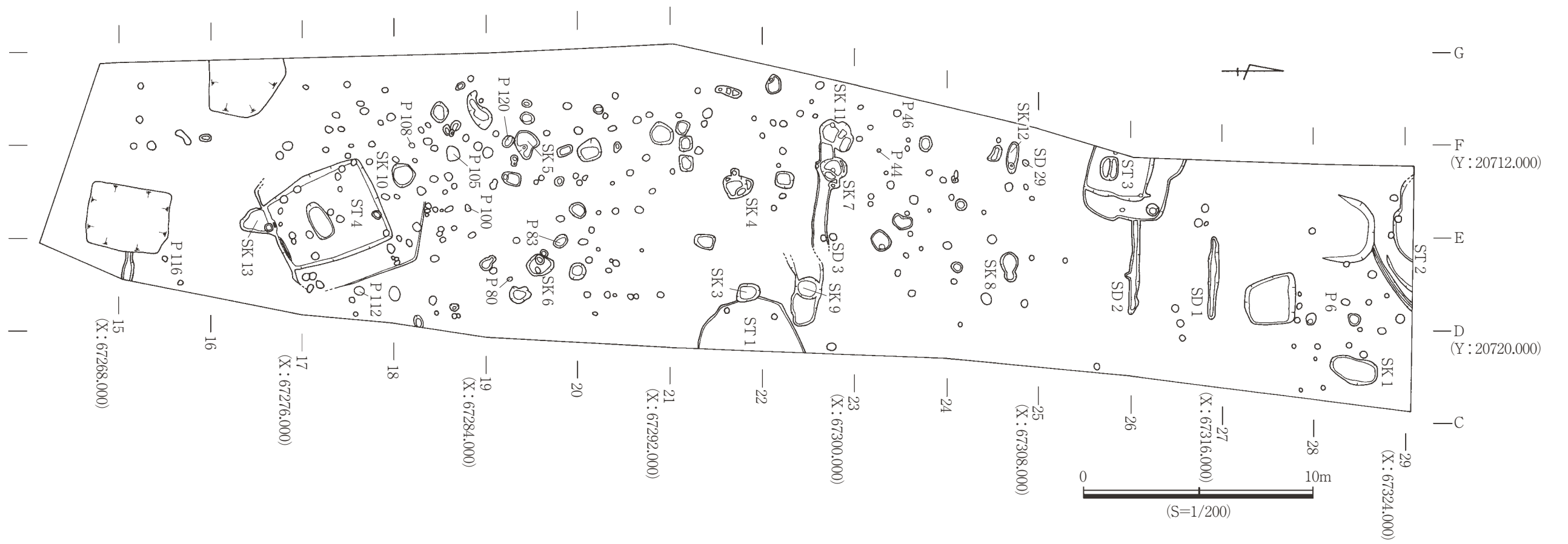


Fig.5 検出遺構全体図



# 第Ⅲ章 調査の成果

## 1 基本層序

調査区北壁の基本層準を示す。

Ⅵ層：茶色粘土に拳大～人頭大の円礫を含む(地山)

Ⅴ層：黒色粘土(遺構埋土)

Ⅳ層：黒ボクを含む黒褐色粘土(遺物包含層)

Ⅲ層：客土

Ⅱ層：客土

Ⅰ層：耕作土

Ⅵ層は低位段丘の基盤を形成する層準で、東に高く西に向かって低くなっており旧地形を現している。遺構の多くはⅥ層に掘り込んでいる。Ⅳ層は弥生～古代の遺物包含層であるが調査区の東側には認められない。東側は、圃場整備の際に削平された可能性がある。Ⅲ・Ⅱ層は、圃場整備の際に置かれた客土である。Ⅰ層は、地表面を形成する耕作土である。

## 2 検出遺構と遺物

### (1) 弥生時代の遺構と遺物

#### ① 竪穴住居

ST 1 (Fig. 7)

調査区中央部の東側で検出した。約半分が調査区外に出ており、SK 3 に切られている。平面形態は多角形の可能性があり、確認長軸は4.7mを測る。壁の立ち上がりは10cm前後で壁溝は認められない。埋土は、Ⅰ層：炭化物を多く含んだ黒褐色砂質土層、Ⅱ層：焼土を多く含んだ暗茶褐色砂質土層である。特に北側半分からは、検出面直下から炭化物や焼土が多く見られ、棒状の炭化材が壁にへばり付いているものもある。

P 1 は、住居址全体の中では西に偏った位置にあるが、中央ピットとして捉えた。検出面には図示したように人頭大から拳大の河原石の集石が認められ、それらを除去すると皿状の落込みが確認できた。長軸66cm、短軸50cm、深さは10cm内外である。中央ピット内にも図示したような河原石の集石がある。中央ピット床面や立ち上がりに炭化物は認められない。これらの集石は、住居の廃棄に伴って意識的に河原石を置いたものと考えられる。西側のコーナー部にP 2、P 3がある。前

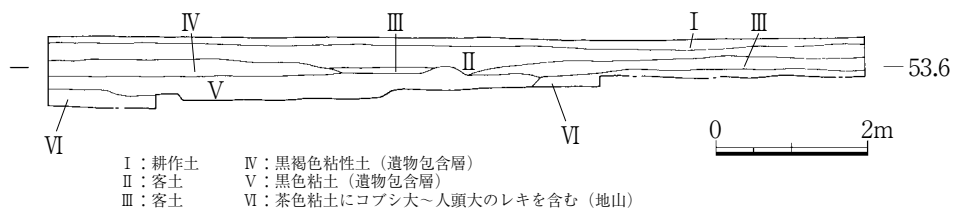


Fig.6 調査区北壁セクション

者は径28cm、深さ14cm、後者は径20cm、深さ24cmを測る。P2の南には長軸30cmの扁平な河原石が床面にくいこむ状態で出土した。ST1に伴うものと考えられるが、使用痕や被熱した痕跡はない。

出土遺物は、壺(1・2)、甕(3・6)、鉢(4・5・7)が出土している。1は中央ピットから、5は床面から他のものは埋土中からの出土である。1は二重口縁の二次口縁部が欠落している。図示し

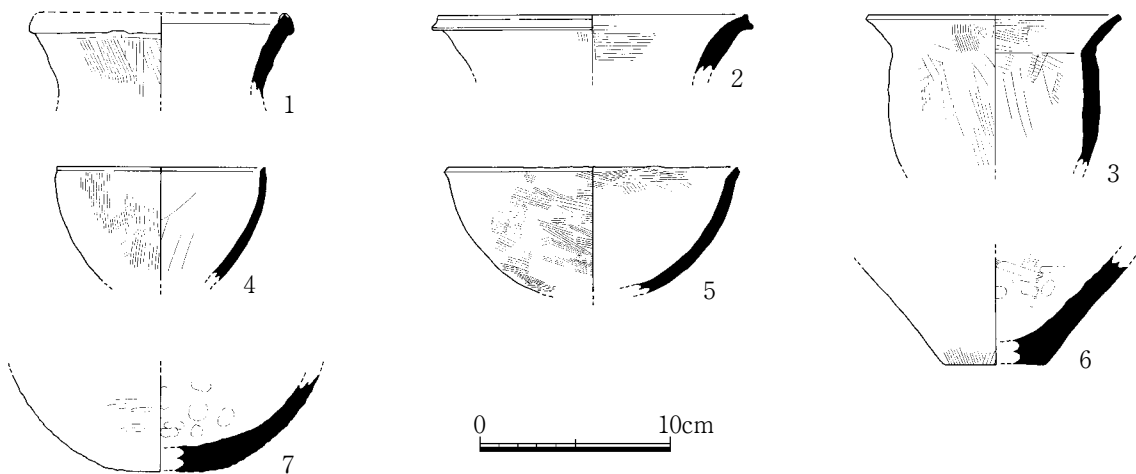
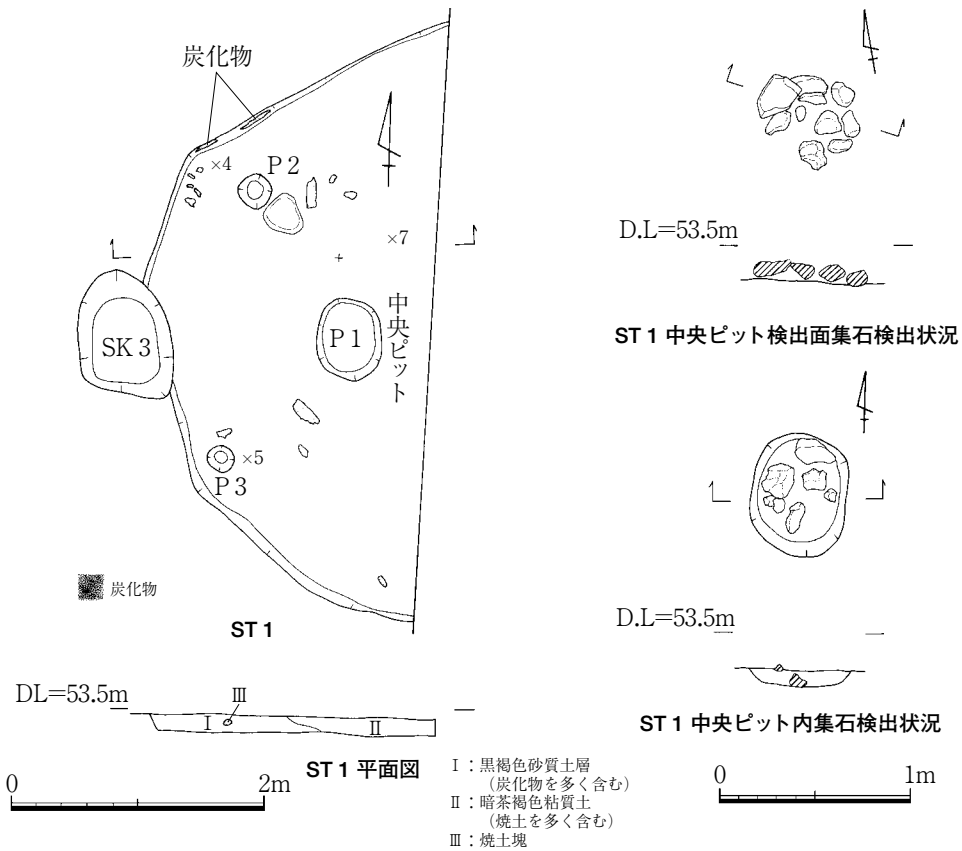


Fig.7 ST1平面・セクション・出土遺物実測図

得なかったものも含めて口縁部の点数から組成比率を見ると壺3点、甕3点、鉢3点である。ST 1は、後期末のⅥ期に属する。

#### ST 2 (Fig.8)

調査区の北端にあり大部分が調査区外に出ている。壁溝とベッド状遺構の一部を確認したのみであるが、平面形態は隅丸方形を有するものと考えられる。北壁セクションで5cm前後の立ち上がりを確認することができる。埋土は黒色粘性土である。壁溝は、東側で幅20cm、深さ3～4cmを確認し得たが西側は攪乱と削平のために検出できなかった。ベッド状遺構は、地山削り出しで幅90cm前後、低床部との段差は6～10cmである。東側のベッド状部は5cm前後の段差をもって二段につくられている。高床部を中心に6個のピットが検出され何れのピットからも弥生後期土器片が出土しているが、ST 2との関係は分からない。

遺物は、広口壺(8・9)、鉢(10・11)、底部(12・13)が出土している。すべて埋土中からの出土である。ST 2は後期末のⅥ期に属する。

#### ST 3 (Fig.9・10)

ST 2の南にある。約3分の1が調査区外に出ており、上層部をSD 2に切られている。一辺3.5m前後の隅丸方形の住居址である。北辺のラインが大きく北に張り出しているが、本来のプランであるのかどうか分からない。埋土はⅠ層：黒褐色クロボク層、Ⅱ層：濃茶色クロボク層である。壁溝は認められない。北側と南側に地山削り出しのベッド状遺構が鈎状に設けられている。高床部の幅は60～80cm、低床部との段差は5～10cmで、緩やかに立ち上がっている。中央ピットは南寄りに位置し長軸1.08m、短軸0.8mの楕円形を呈し、検出面に炭化物の広がりが見られた。深さは最も深いところで10cmを測るが、床面は南半分が3cm程高くなっている。北コーナーのP 1は径50～60cm、深さ25cmを測り、下層から拳大の河原石が数個出土した。P 3とP 4は支柱穴と考えられる。各々径25cmを測り、深さはP 3が10cm、P 4が35cm、P 3には検出面直下に人頭大の河原石が置かれていた。またP 4の南の床面には被熱した30cm余りの河原石が置かれている。

遺物は壺(14)、甕(20～26・29)、鉢(15～17)、高坏(18・19)、底部(27・28)、叩き石(32)の他混入の須恵器坏(31)、同壺(30)が出土している。広口壺の口縁部(14)はP 4、高坏坏部(19)と底部(28)はP 3、甕(21・29)はP 1から出土している。また床面からは鉢(15～17)、叩き石(32)が出土し、他は埋土中の出土である。図示し得なかったものも含めて口縁部片から組成比を求めると、甕13点(61.9%)、壺1点(4.8%)、鉢5点(23.8%)、高坏2点(9.5%)である。底部は確認し得た10点中の1点が丸底で他はすべて平底である。底部の特徴として外底に叩きを留めるものが多く見られる。また鉢の15・17はほとんど完形品であることから、住居址の廃棄に伴って意図的に置かれた可能性がある。ST 3は後期最終末のⅥ-2期に属する。

#### ST 4 (Fig.11～16)

調査区の南部にある。平面形態を十分に明らかにし得なかったが、一辺5m前後の多角形を有する可能性がある。西側の立ち上がりを確認することはできないが、地山削り出しのベッド状遺構がコの字状に設けられている。比較的残りの良い東側では高床部の幅が1m前後、低床との段差20cm

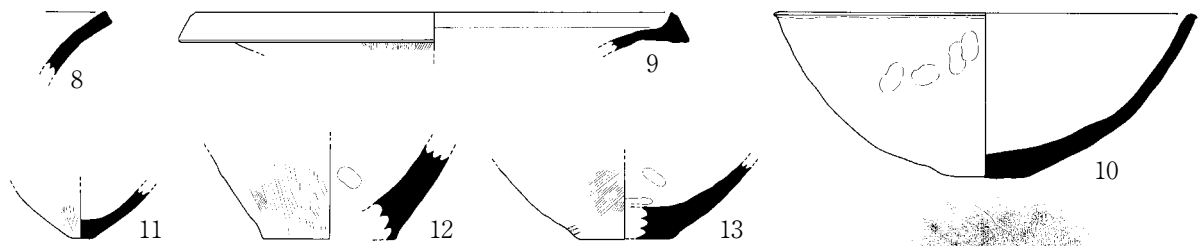
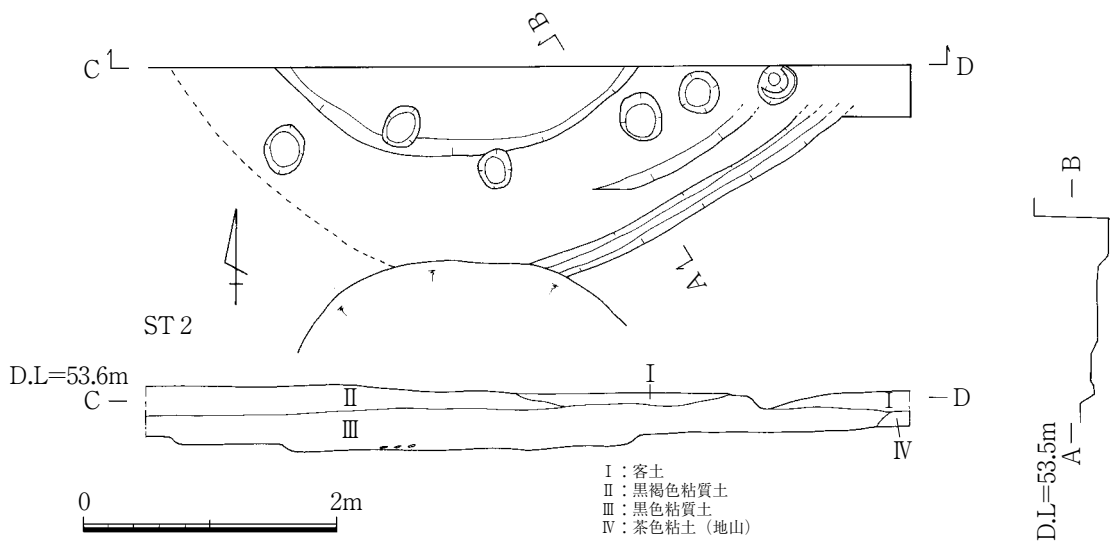


Fig.8 ST2平面・セクション・出土遺物実測図

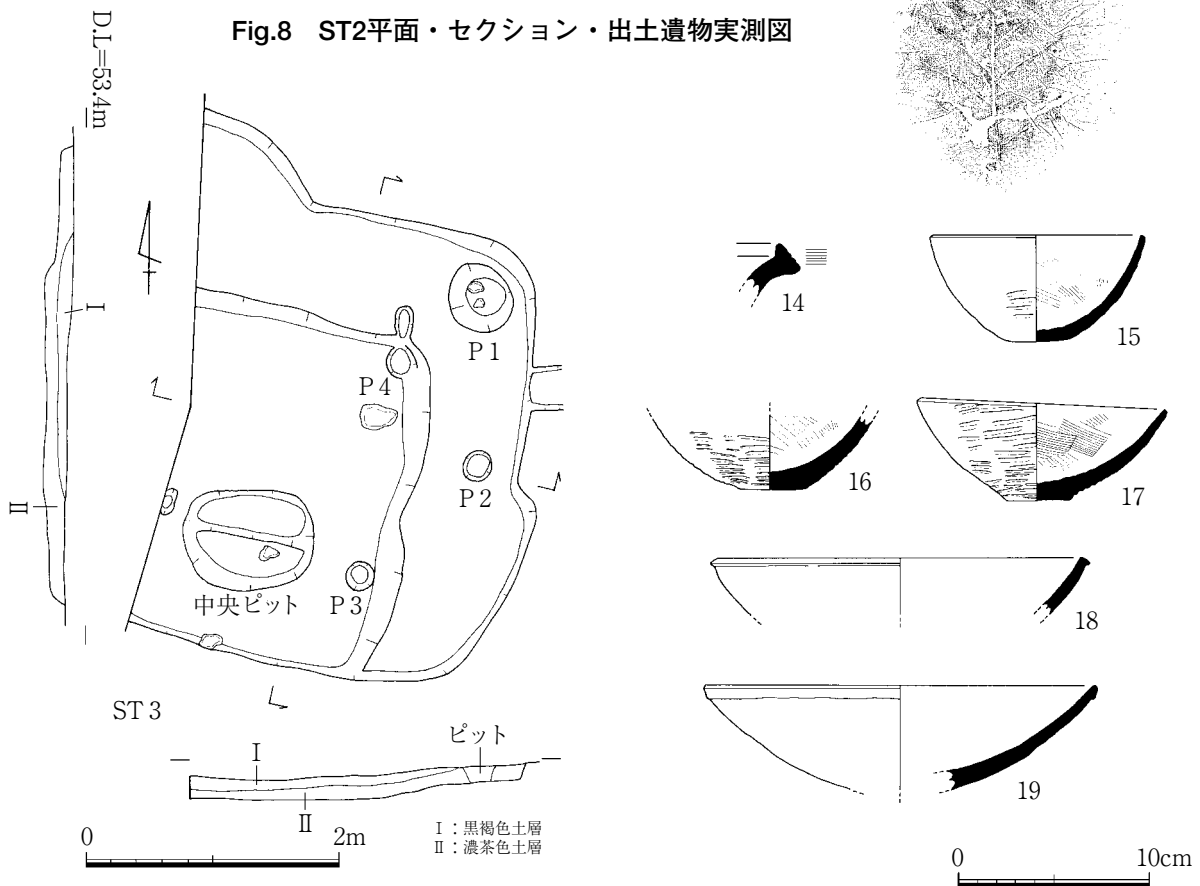


Fig.9 ST3平面・セクション・出土遺物実測図

前後を測る。また低床部との段差は北側において最も高くなっており25cmを測るところもある。

壁溝は南壁において一部認められるのみである。中央ピットは南側に寄った位置にあり、長軸1.7m、短軸0.9mの楕円形で深さは10cmを測り、断面形は皿状を呈する。床面には多数のピットが掘り込まれており、これらの中には明らかに古代や中世に属するものもある。支柱穴を特定することは難しいが、位置関係から低床のコーナー部にあるP6、P7やP13、P14をそれに該当させることができよう。これらのピットは径30cm前後を測る。ST4の主要な埋土は、I層：小礫を含んだ黒褐色砂質土層とII層：同じく小礫を含んだ暗褐色砂質土層である。中央ピットの埋土には炭化物が少量入っている。

ST4の東北部分からは、図示したように大量の河原石と土器が集中して検出された。東北のコーナー部から中央部に向かって長さ3.6m、幅1.6mの範囲に集中しており、特に低床と高床の変化点付近に多く数個体分の土器が集石に押し潰された状態で出土している。礫は拳大から人頭大の河原石の円礫である。これらの礫と土器は、低床部の床面から詰まっており、住居の廃絶に伴って意図的に置かれたことは明白である。

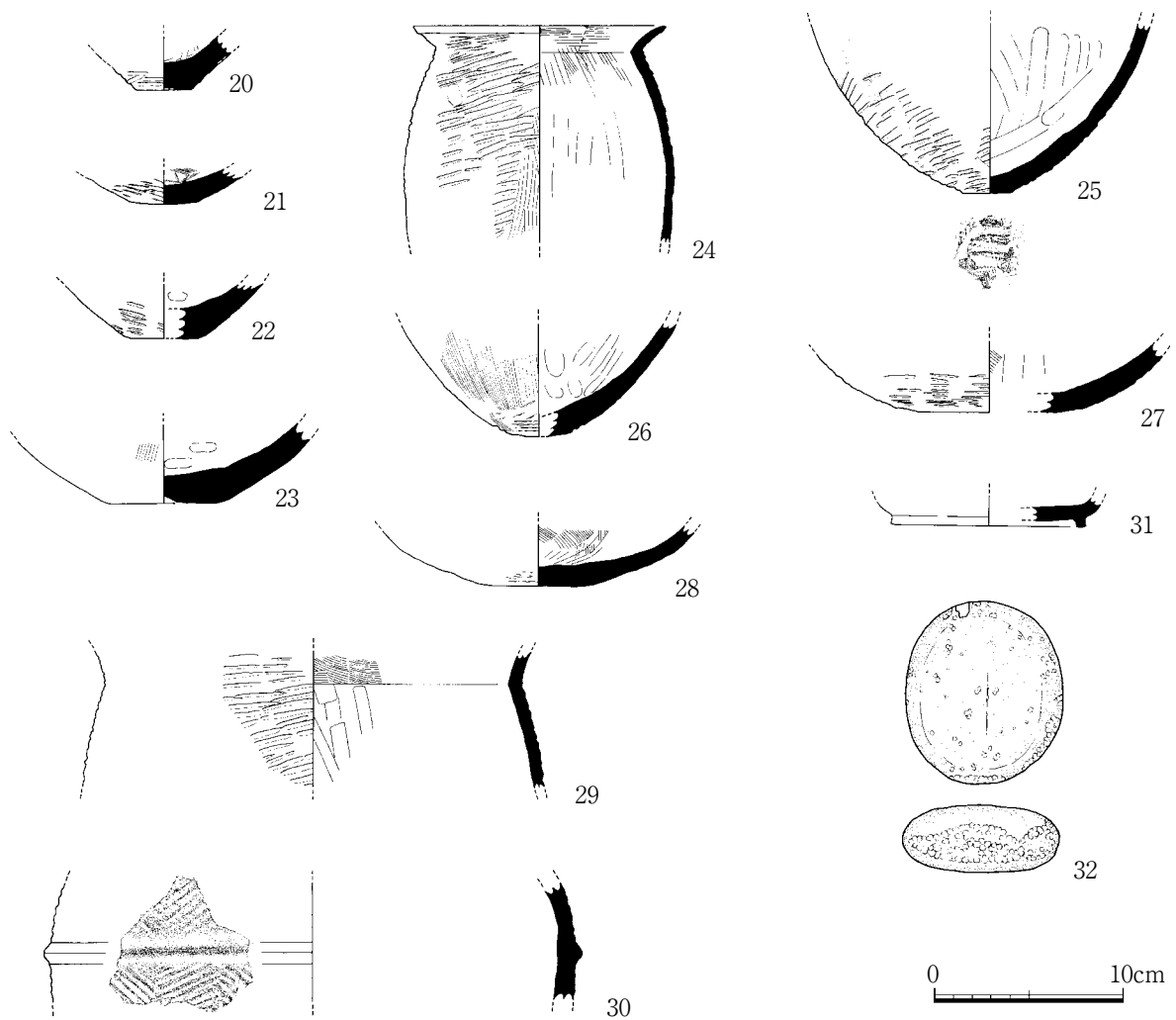


Fig.10 ST3出土遺物実測図

ST4からは大量の土器が出土しているが、その多くは集石中からのものである。ここでは、集石中とそれ以外のものとに分けて述べる。集石中からは、壺(33・34・76・79)、甕(35~50)、鉢(55~59)、台石(80・81)が出土している。図示し得なかったものも含めて口縁部片から組成を見ると、甕34点

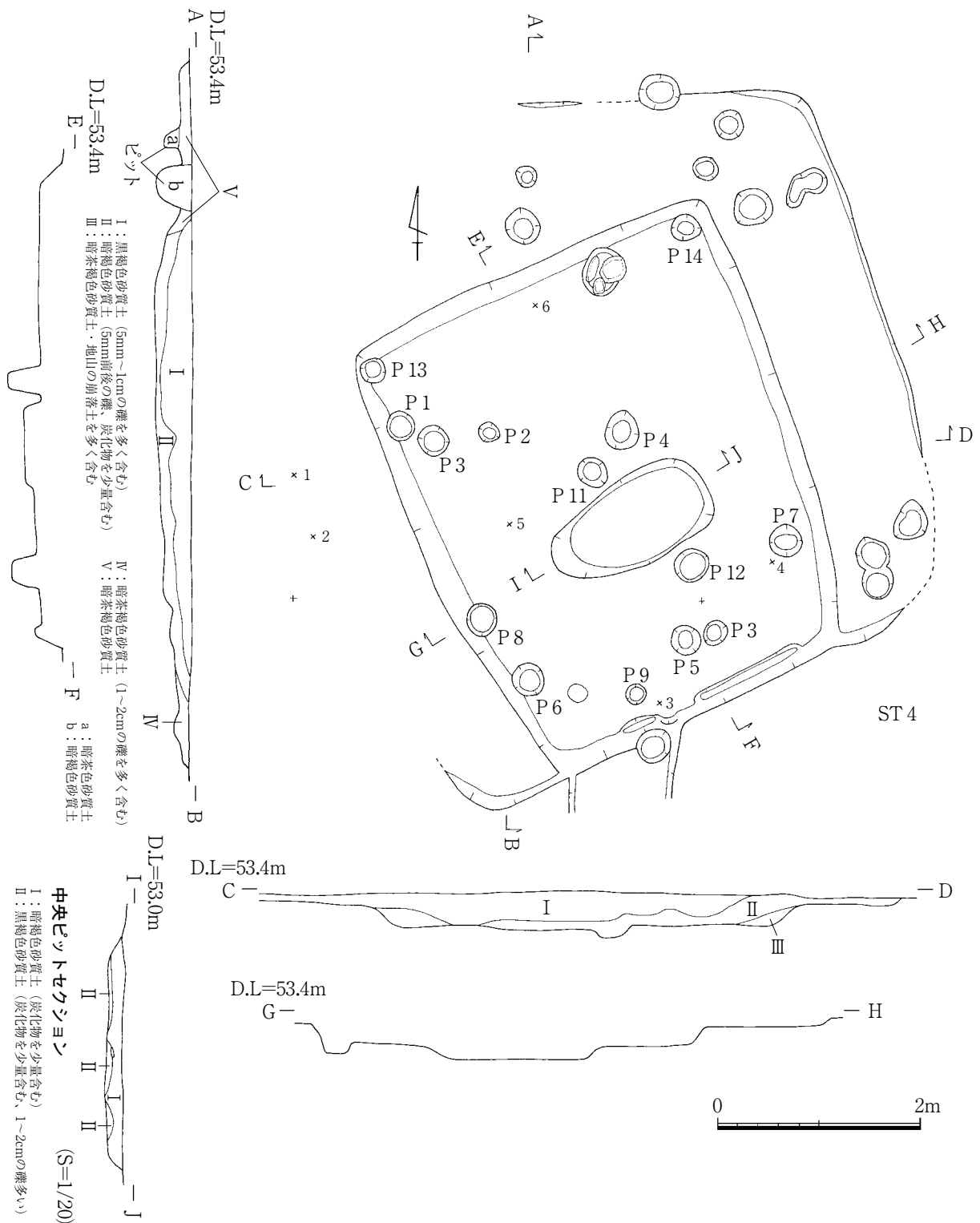


Fig.11 ST4平面・セクション・エレベーション図



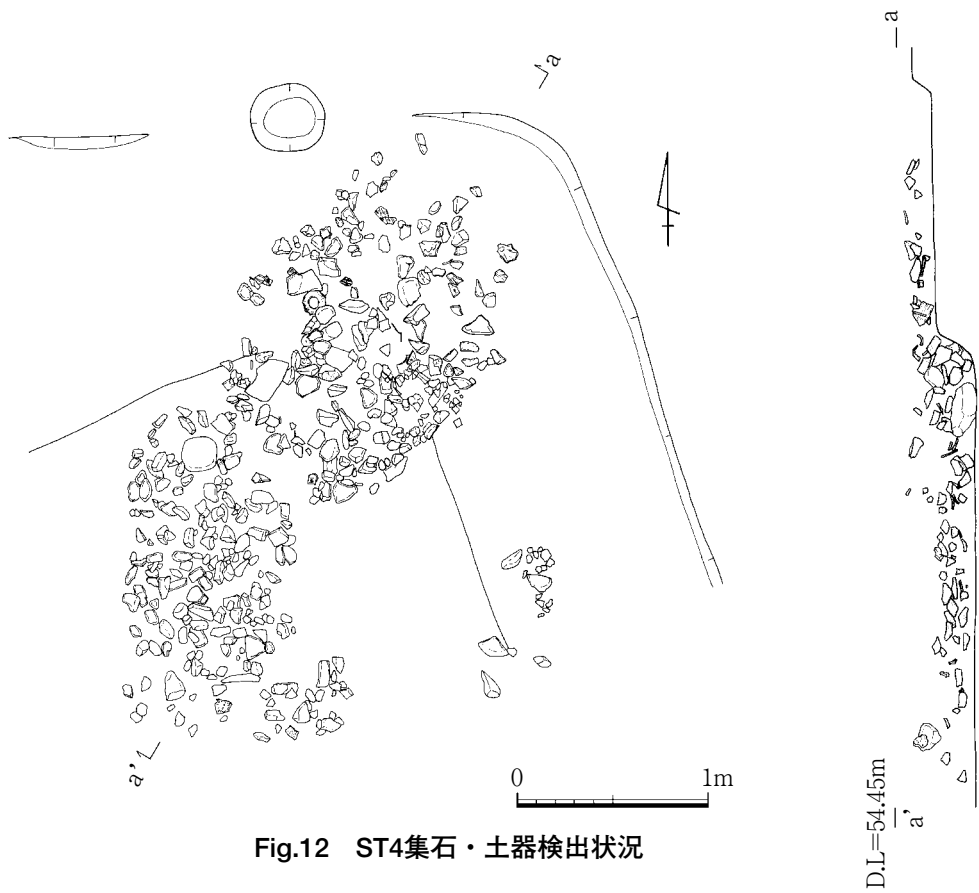


Fig.12 ST4集石・土器検出状況

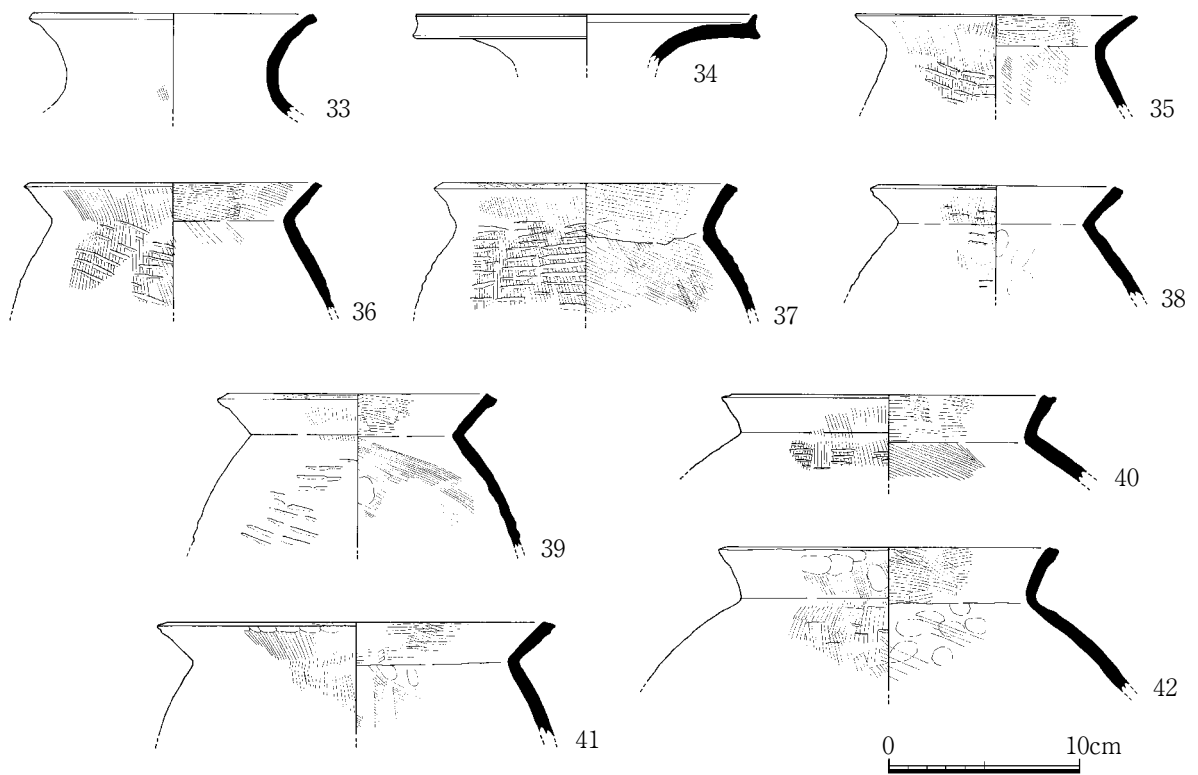


Fig.13 ST4出土遺物実測図1

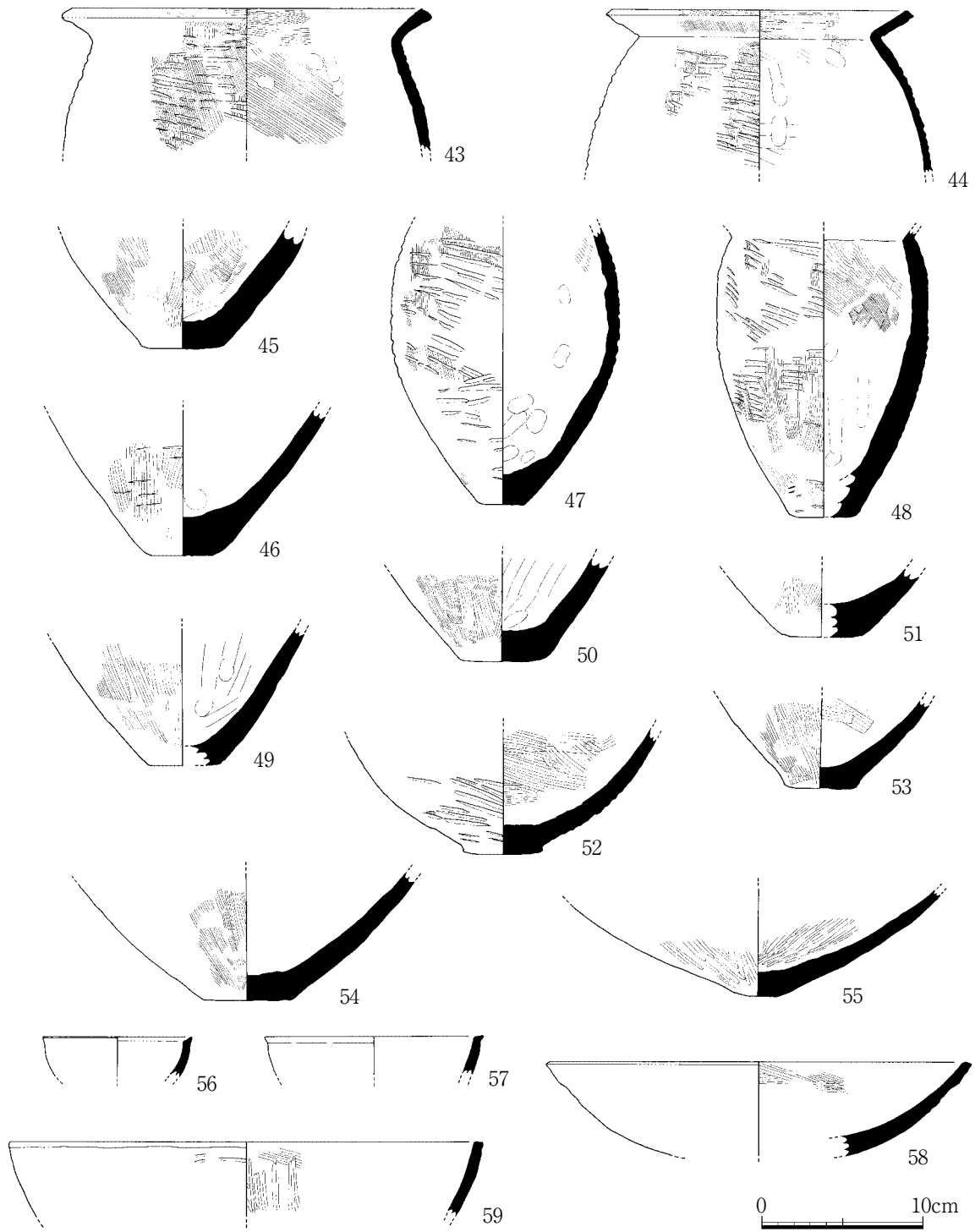


Fig.14 ST4出土遺物実測図2



Fig.15 ST4出土遺物実測図3

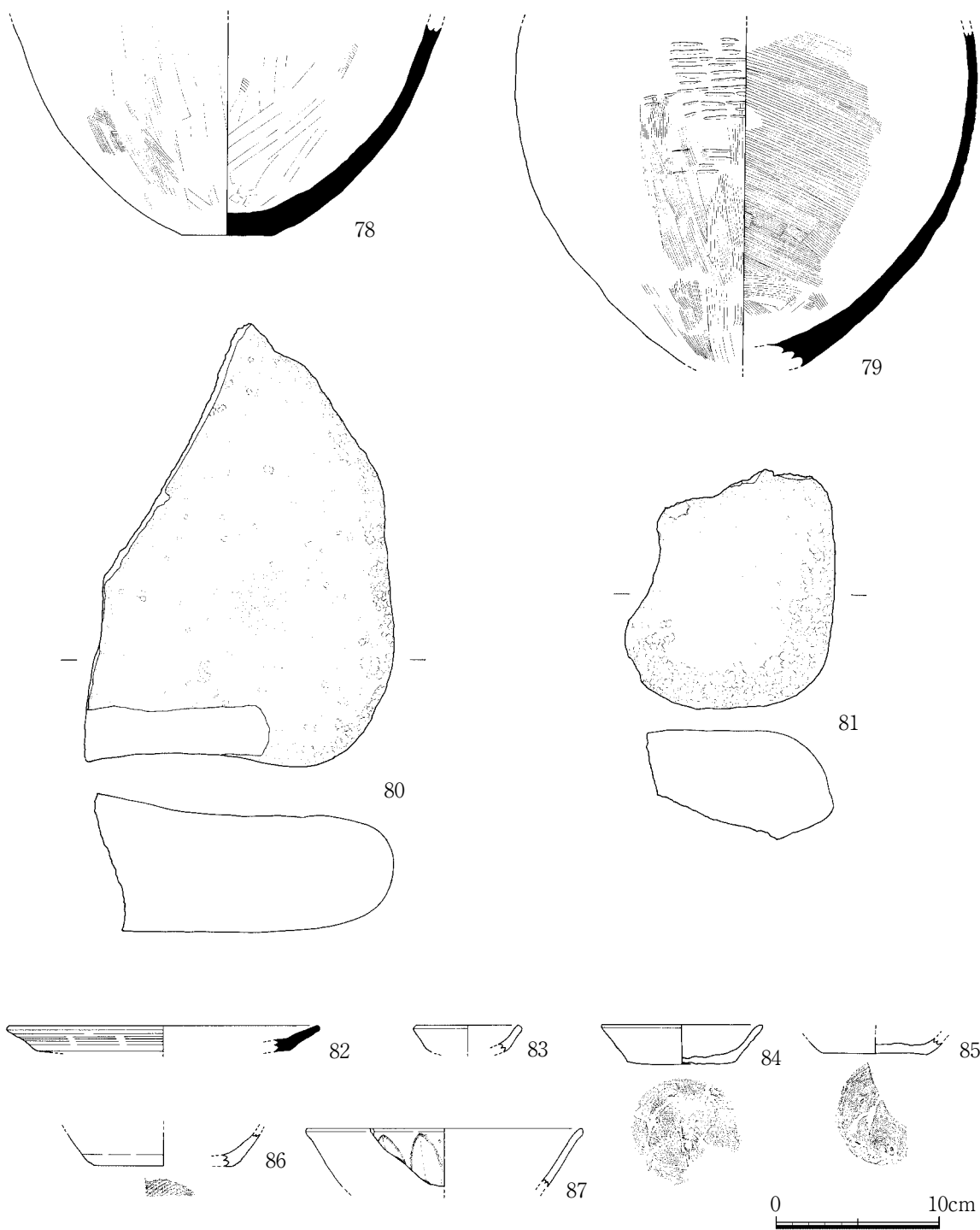


Fig.16 ST4出土遺物実測図4 (82~87は混入遺物)

(82.9%)、壺3点(7.3%)、鉢4点(9.8%)である。甕はすべてが単純な砲弾形で例外なく口唇部面取りを施している。底部形態が確認できる個体は39点あり、その内37点が平底、2点が丸底である。

集石以外の弥生土器は、壺(60・61・78)、甕(62～68・74)、鉢(69・70・72・73・75)を図示した。高坏(71)、鉢(72・73)、壺(77・78)は床面出土で、77はP7とP8及び床面出土の接合資料である。62はP5出土である。床面出土の72・73の鉢は、ST3で見たのと同様に住居廃絶に際して意図的に置かれたものと考えられる。図示し得なかったものも含めて口縁部片から組成を見ると甕26点(63.4%)、壺7点(17.1%)、鉢7点(17.1%)、高坏1点(2.4%)である。甕はすべて砲弾形のタイプで、壺は広口壺が6点、二重口縁壺が1点である。底部形態は28点中の1点が尖底である他はすべて丸底である。集石出土の土器とそれ以外の土器との時期的な違いは存在しない。ST4は後期最終末のVI-2期に属する。多量の集石と土器は竪穴住居の廃絶に伴う祭祀的な行為と考えることができる。

## ②土坑

### SK1 (Fig.17・21)

調査区の東北隅に位置する。楕円形のプランを有し長軸2.1m、短軸1.6m、深さ42cmを測り、床面は平坦で壁は直線的に立ち上がる。埋土は黒茶褐色粘性土である。遺物は床面からヤリガンナ(139)が出土している。基部を欠いているが先端部から7.5cmが残っている。刃部最大幅は1.9cm、厚さ3mmである。SK1は後期の土坑墓の可能性はある。

### SK3 (Fig.17)

調査区中央部にありST1を切っている。長軸98cm、短軸72cmの不整形プランの土坑で深さは30cmを測る。埋土はI層：風化礫を多く含んだ暗褐色砂質土、II層：黄色褐色砂質土、III層：暗褐色砂質土で、埋土各層は焼土、炭化物を含んでいる。遺物は弥生後期土器の細片が出土しているが、SK3の時期はもっと下がる可能性がある。

## ③ピット

### P6 (Fig.19)

径38×30cmの楕円形のピットで、深さ32cmを測る。黒褐色の埋土で、埋土中より2個体分の甕(92・94・95)とともに板状の鉄片が出土している。鉄片は長さ4cm、幅2.5cm、厚さ3mm前後を測る。P6は弥生後期終末のVI期に属する。

### P44 (Fig.19)

径20cm、深さ14cmを測る。甕胴部(91)が出土しているが、もとは1個体入っていたものと考えられる。

### P120 (Fig.19)

径50cm×44cmの楕円形のプランを有し、深さは16cmを測る。弥生後期土器細片とともに打製石包丁(104)が出土している。石包丁は頁岩製で半分以上が欠落している。側縁部には弧状の抉りが見られる。

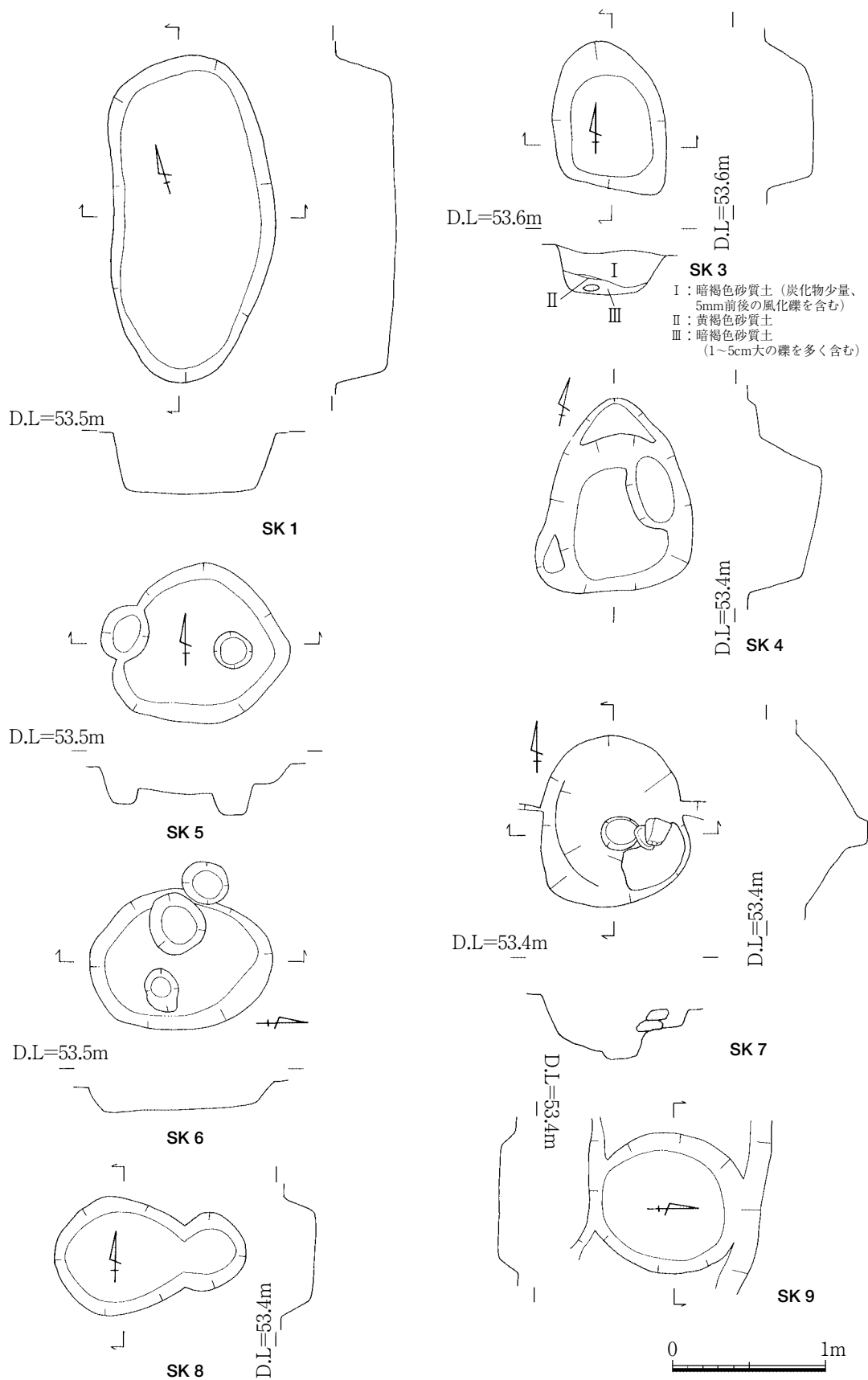


Fig.17 土坑 (SK 1・3～9) 平面・セクション・エレベーション図

## (2) 古代以降

### ①土坑

#### SK 4 (Fig.17・19)

調査区の中央部にある。三角形状のプランを呈し長軸1.26m、短軸0.96mを測る土坑である。北に浅井段が造られており、深さは34～48cmを測る。床面は南から北に深くなっており、東壁際には凹みがある。埋土は暗褐色粘質土である。埋土中より弥生後期土器細片とともに須恵器椀(88)、人頭大の河原石が3個入っていた。

#### SK 5 (Fig.17)

楕円形状のプランを有し、長軸1.18m、短軸1.06m、深さ20cm前後を測る。小ピットと切り合っているが先後関係は不明である。埋土は黒褐色砂質土で5cm前後の風化礫を多く含み、炭化物も入っている。埋土中からは、弥生後期土器細片と瓦質土器細片が出土している。

#### SK 6 (Fig.17)

楕円形状のプランを有し、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ14～28cm前後を測り床面は北に向かって緩やかに上がっている。2個の小ピットに切られている。埋土は黒褐色砂質土で5cm前後の風化礫を多く含み、炭化物も入っている。埋土中からは、弥生後期土器細片、須恵器甕細片、瓦質鍋細片が出土している。

#### SK 7 (Fig.17・19)

SD 3 と切り合っているが先後関係は不明である。楕円形のプランを呈し長軸1.12m、短軸0.92m、深さ46cmを測る。南北断面は漏斗を呈する。中央部に径26cmの柱穴と考えられる落込みがある。南東隅には平坦部が設けられ裏込めの扁平な河原石が2個摘まれている。埋土中より土師器皿(89)が出土している。また埋土下層からは人頭大の河原石が3個出土しており、その内1個は焼けている。これらの石も裏込めに使われたものであろう。K 7 は土坑としたが柱の掘方である。

#### SK 8 (Fig.17)

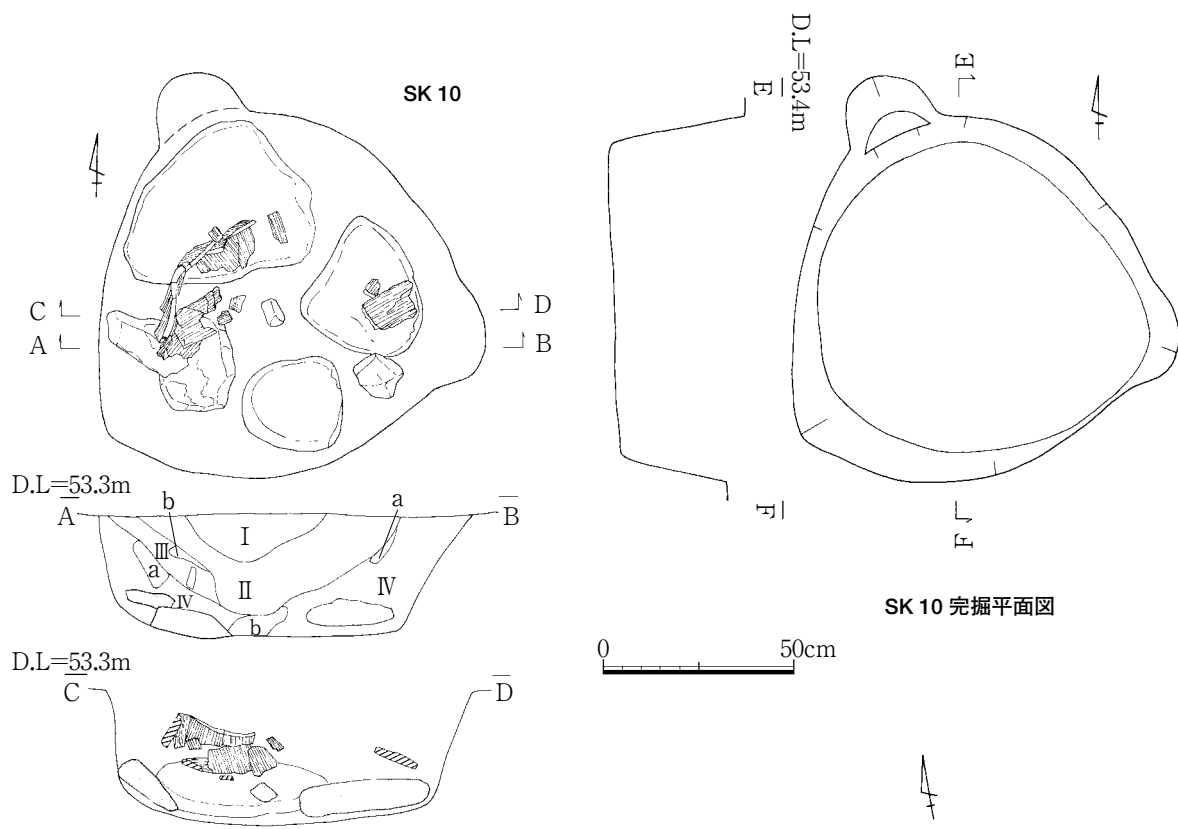
楕円形のプランを呈し長軸0.9m、短軸0.8m、深さ20cm前後を測る。東でピットと切り合っているが先後関係は不明である。埋土は黒褐色粘質土で、埋土中より弥生後期土器細片とともに須恵器の細片が出土している。古代に属する。

#### SK 9 (Fig.17・19)

楕円形のプランを呈し長軸1.1m、短軸0.9m、深さ10cm前後である。床面は平坦で壁は斜めに直線的に立ち上がる。埋土は黒褐色砂質土である。埋土中より弥生土器細片、須恵器細片とともに瓦質鍋(90)が出土している。中世に属する。

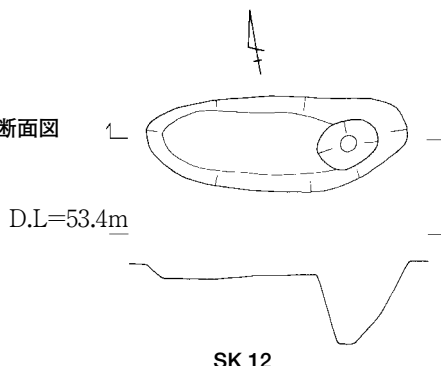
#### SK 10 (Fig.18・21)

ST 4 の北で検出した近世墓である。平面プランは一辺1m前後の隅丸三角形状を呈し、北隅で小ピットを切っている。埋土はⅠ～Ⅳ層からなりⅡ～Ⅳ層には炭化物や焼土がブロック状に入っている。特にⅣ層上面には炭化した藁が塊状になって出土し、焼土は床面直上で特に多く認められる。床面には長軸50cm～30cmの河原石が据え置かれ、その上から炭化した板材が検出された。一部で

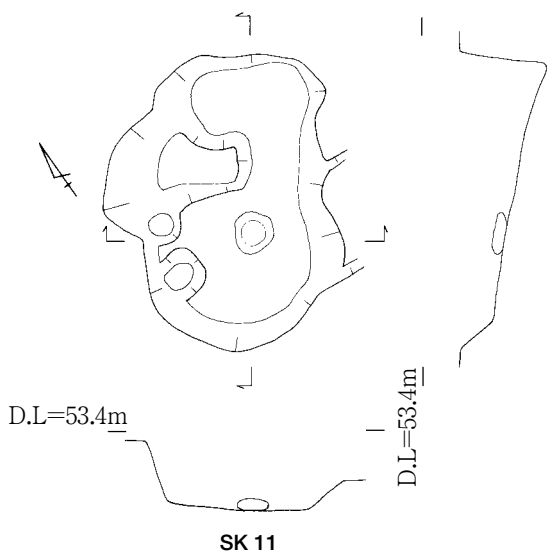


SK 10 遺物出土状況・セクション、見通し断面図

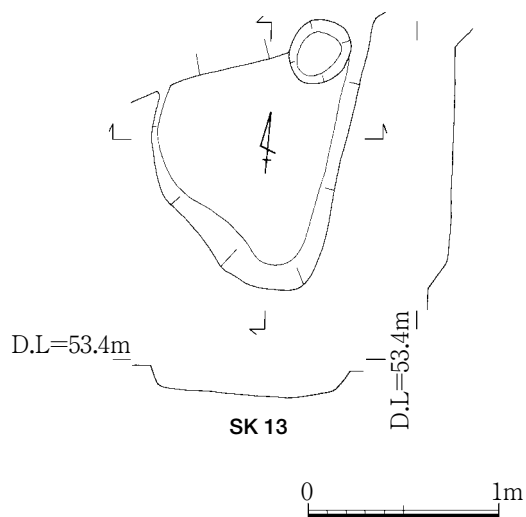
- I : 黒褐色砂質土 (焼土・炭化物を含む)
- II : 暗褐色砂質土 (焼土・炭化物を多く含む)
- III : 暗褐色砂質土 (焼土・炭化物を多く含む)
- IV : 暗褐色砂質土 (炭化物をブロック状に含む)
- a : ワラの状炭化物
- b : 焼土



SK 12



SK 11



SK 13

Fig.18 土坑 (SK10~13) 平面・セクション・エレベーション図



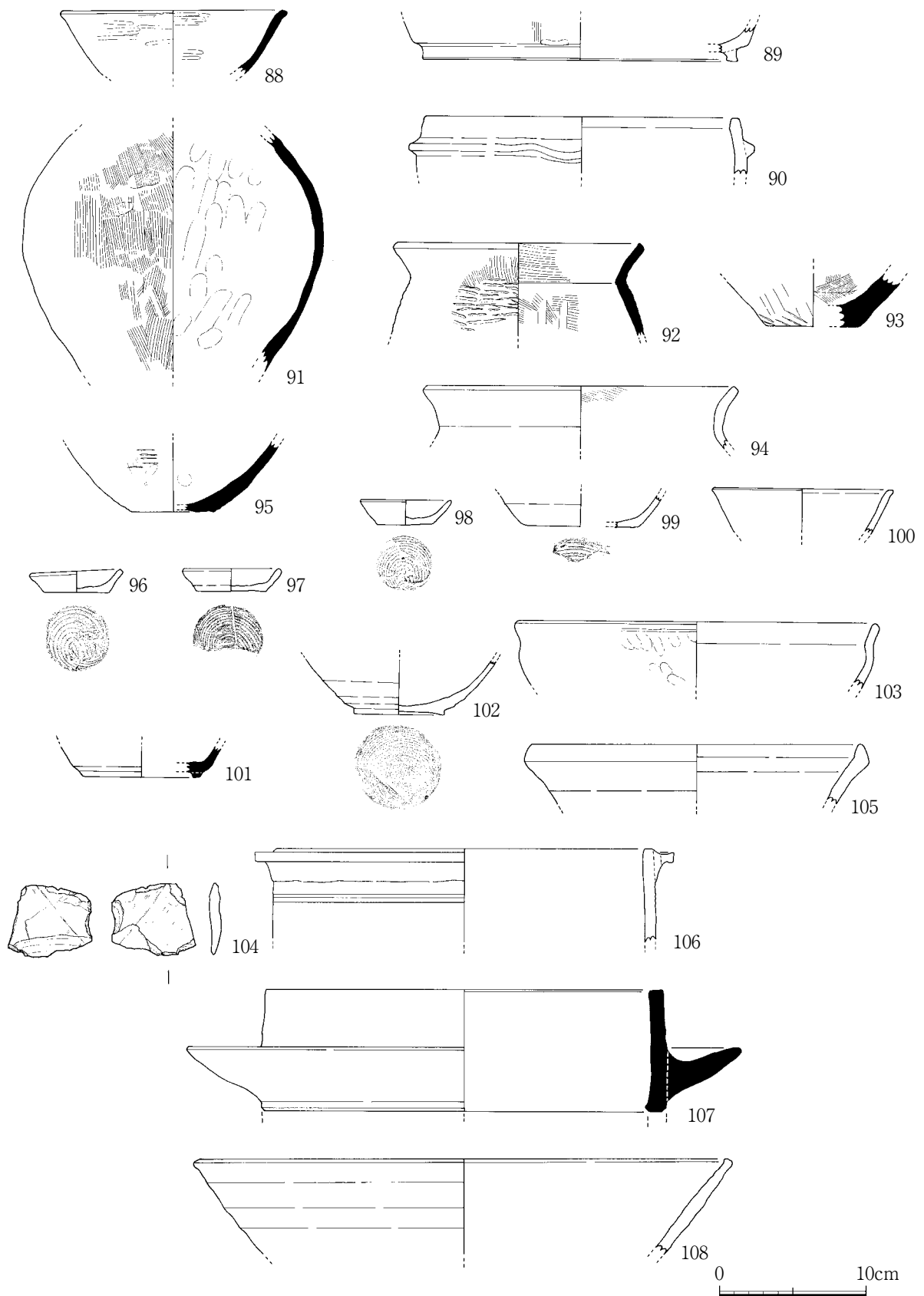


Fig.19 土坑・ピット出土遺物実測図

(SK 4 : 88, SK 7 : 89, SK 9 : 90, SD 2 : 93, P 6 : 92・94・95, P 29 : 106, P 44 : 91, P 46 : 100・107, P 80 : 101, P 83 : 87, P 100 : 103, P 105 : 105・108, P 108 : 96・98, P 112 : 99, P 116 : 102, P 120 : 104)

側板と底板の接合部を確認することができたことから、これらの板材はもとは箱であったことがわかる。厚さ2cm程の板で作られた箱が河原石の上に置かれ焼失したものである。炭化材の廻りからは鉄釘が4点(140~143)、寛永通宝が5枚出土している。寛永通宝が出土したことからSK10は近世の火葬墓とすることができる。したがって炭化材は焼失した棺である。棺の大きさを推定することは難しいが、礫床の上に棺を置き焼かれた後に埋め戻されたものと考えられる。

## ②ピット

200個以上のピットを検出したが、掘立柱建物等を復元することはできなかった。多くのピットから土師器細片が出土しており、古代・中世に属するものがほとんどであると考えられる。ここでは図示し得た遺物の出土したピットについて述べる。

### P 29 (Fig.19)

38cm×26cmの楕円形プランを有し、深さ32cmを測る。土師器の長胴羽釜(106)が出土している。内外面強い横ナデ調整が施され、外面は煤けている。

### P 46 (Fig.19)

34cm×28cmの楕円形プランを有し、深さ25cmを測る。土師器坏(100)、土師器移動式カマド(107)が出土している。椀は精選された胎土でナデ調整が施されている。カマドは口縁部下に幅5cmの大きな鏝が巡る。

### P 80 (Fig.19)

径22cm、深さ25cmを測る。須恵器坏底部(101)が出土している。

### P 83 (Fig.20)

60cm×50cmの楕円形プランを有し、深さは17cmを測る。土師器小皿(97)、瓦質土器捏ね鉢(109)の他土師器細片が多く出土している。小皿は糸切り、捏ね鉢は片口を有する。

### P 100 (Fig.19)

径25cm、深さ30cmを測る。瓦質鍋(103)が出土している。

### P105 (Fig.19)

60cm×50cmの不整形のプランを有し、深さ20cmを測る。床面より10cm浮いて径30cmの扁平な河原石が置かれている。東播系の捏ね鉢を模倣した土師器鉢(105)と瓦質鉢(108)、の他に土師器小皿が出土している。105は二次的な熱を受け変色している。

### P 108 (Fig.19)

径22cm、深さ25cmを測る。土師器小皿(96・98)が出土している。共に糸切り底である。

### P 112 (Fig.19)

44cm×40cmの楕円形プランを有し、深さ14cmを測る。土師器坏(99)が出土している。糸切り底である。

### P 116 (Fig.19)

30cm×20cmの楕円形プランを有し、深さ20cmを測る。土師器椀(102)が出土している。円盤状高台を有し、糸切りである。

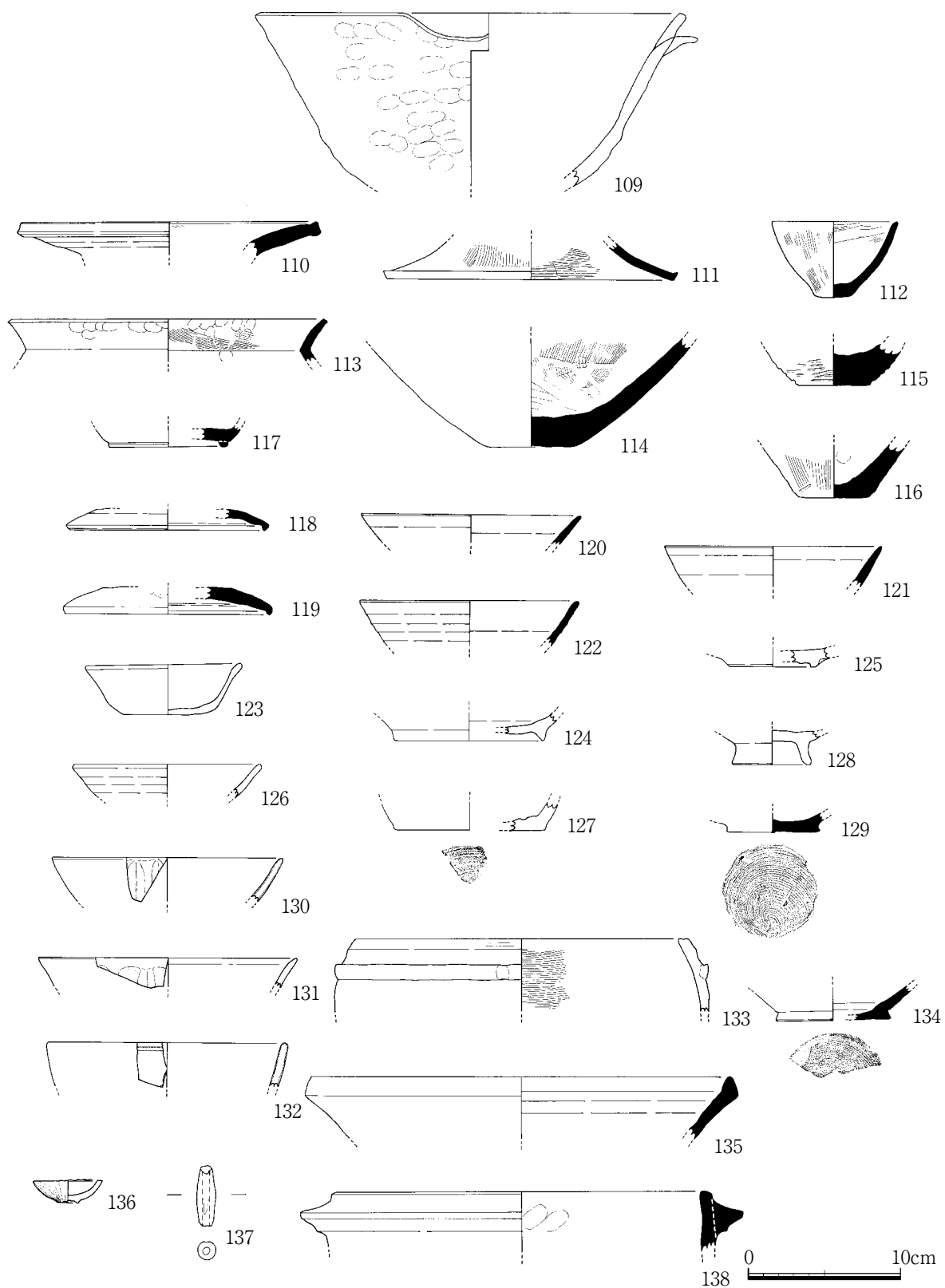


Fig.20 P83(109)・包含層出土遺物実測図(110~138)

弥生土器壺(110)・同蓋(111)・同鉢(112)・同甕(113)・同底部(114~116)、須恵器坏(117・120~122)・同蓋(118・119)、同碗(129・134)、土師器坏(123~128)・同甕(138)、青磁稜花皿(125)・同碗(130~132)、瓦器鍋(133)、東播系須恵器鉢(135)、土錘(137)、肥前紅猪口(136)

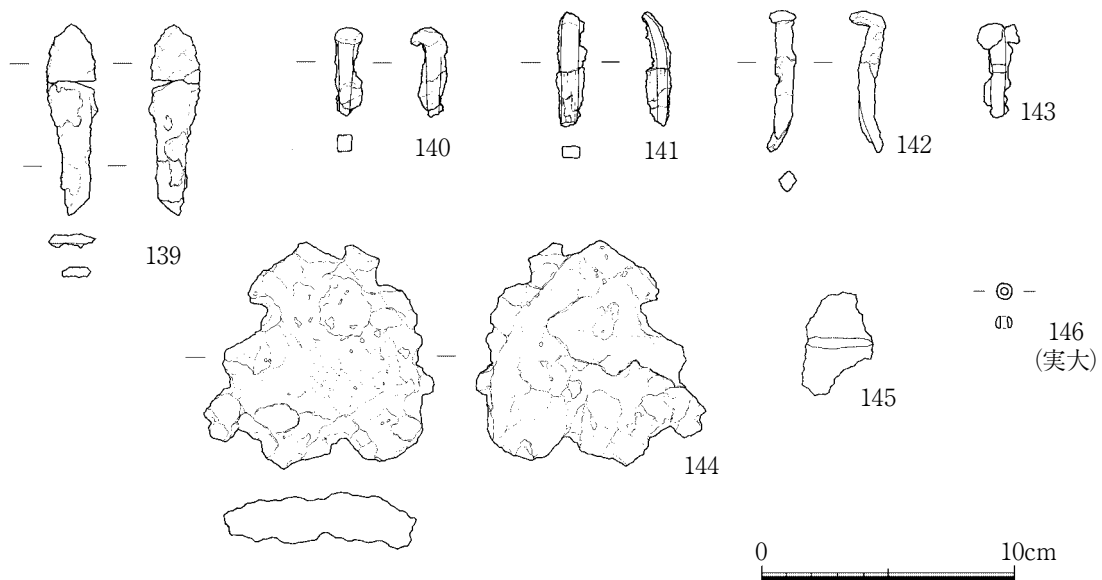


Fig.21 ヤリガンナ(SK 1:139)、釘(SK10:140~143)、鉄片(ST 4:144、P 6:145)、ガラス玉(包含層) 実測図

### (3) 包含層出土の遺物

包含層からは、弥生後期末の壺(110・114)、甕(113・115・116)、蓋(111)、鉢(112)、須恵器坏(117・120~122)、土師器坏(123・126・127)、須恵器椀(129・134)、青磁椀(130~132)、青磁稜花皿(125)、瓦質鍋(133)、東播系捏ね鉢(135)、土師器羽釜(138)、肥前系紅猪口(136)、土錘(137)が出土している。これらの内、須恵器坏・蓋(117~122)、土師器坏(123・126)は8世紀後半から9世紀代、土師器坏(124・127・128)、須恵器椀(129・134)は10世紀後半に、青磁類は15世紀代に属するものである。

## 第Ⅳ章 考察竪穴住居の廃絶について

はじめに

林田遺跡のⅠ区(1999年度調査)、Ⅲ区(2000年度調査)において弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居址を11棟検出した。これらの竪穴住居址の中でⅠ区のST2やST6、Ⅲ区のST4からは多量の土器や河原石の集中が認められた。既に報告書や本文で触れたように、これらは出土状況から判断して竪穴住居の廃絶に伴う意図的な行為であると見られる<sup>(1)</sup>。筆者は小籠遺跡の報告においても竪穴住居の廃絶に伴い意図的な埋め戻しの行われていることを指摘した<sup>(2)</sup>。他の遺跡においても弥生時代後期から古墳時代前期に同様な事例が多く報告されるようになった。

竪穴住居の廃絶については、遺物の出土状況からさまざまなパターンに分類することができるが、ここでは大量の土器や河原石が集中出土する事例を紹介し、それらの意味について考えてみたい。

青木一男氏は、長野市松原遺跡の分析から竪穴住居の廃絶段階に意図的な遺物廃棄の行われたことを指摘し、遺物の出土状況の分析から竪穴住居の機能停止段階に「埋め戻し行為」、「火入れ行為」、「土器の廃棄あるいは遺棄行為」のあることを復元している。その上で大量の土器については、集落構成員による共飲共食儀礼の結果であるとの興味深い見解を示している<sup>(3)</sup>。また山本哲也氏も東崎遺跡の報告書の中で、竪穴住居の廃絶について触れられ「集落内の共同祭儀」として建物の解体等が行われてた可能性を指摘している<sup>(4)</sup>。

### 1 竪穴住居の廃絶事例

廃絶竪穴住居から大量の土器や河原石が集中して出土する場合、その出土状況から大きく次の3型態に分けることができる。Ⅰ型態：床面から大量の土器が出土する。Ⅱ型態：床面から浮いた状態で大量の土器が出土する。Ⅲ型態：大量の河原石と共に土器が出土する。河原石や土器は多くの場合床面から浮いており、河原石が幾つかの群に別れるⅢA型態と群に別れないⅢB型態とに分けることができる。Ⅲ型態の土器の出土状況は、Ⅰ・Ⅱ型態に較べると密集度においてやや粗となる傾向にある。以下、具体的な事例について紹介したい。

#### (1) 小籠遺跡 (Fig.22)<sup>(5)</sup>

高知平野の中央部に位置する。弥生時代後期から古墳前期を中心とする集落遺跡で22棟の竪穴住居址が検出されている。これらの中でⅠ型態とⅢB型態が1例ずつ検出されている。Ⅰ型態のST17は、一辺が6m前後を測る隅丸方形の住居址で弥生時代後期末(VI-1期)に属する。床面から10個体以上の甕を中心に、壺4個体前後、鉢7～8個体、高坏、砥石、石包丁が出土している。図示したようにこれらの出土状況はA、B、Cの3ブロックに分けることができ、接合関係も各ブロック内において完結する傾向にある。しかもAブロックからはほぼ完形復元可能な壺、甕、鉢が各1点、Bブロックからは甕が5個体以上集中、Cブロックにおいては大型鉢が2個体出土するなど器種に偏りが見られる。このような出土状況は、報告者も述べているように「土器の廃棄に対して一定の意図」が働いていることは明瞭であろう。床面出土の土器が3群から構成されていることは、廃絶に際し

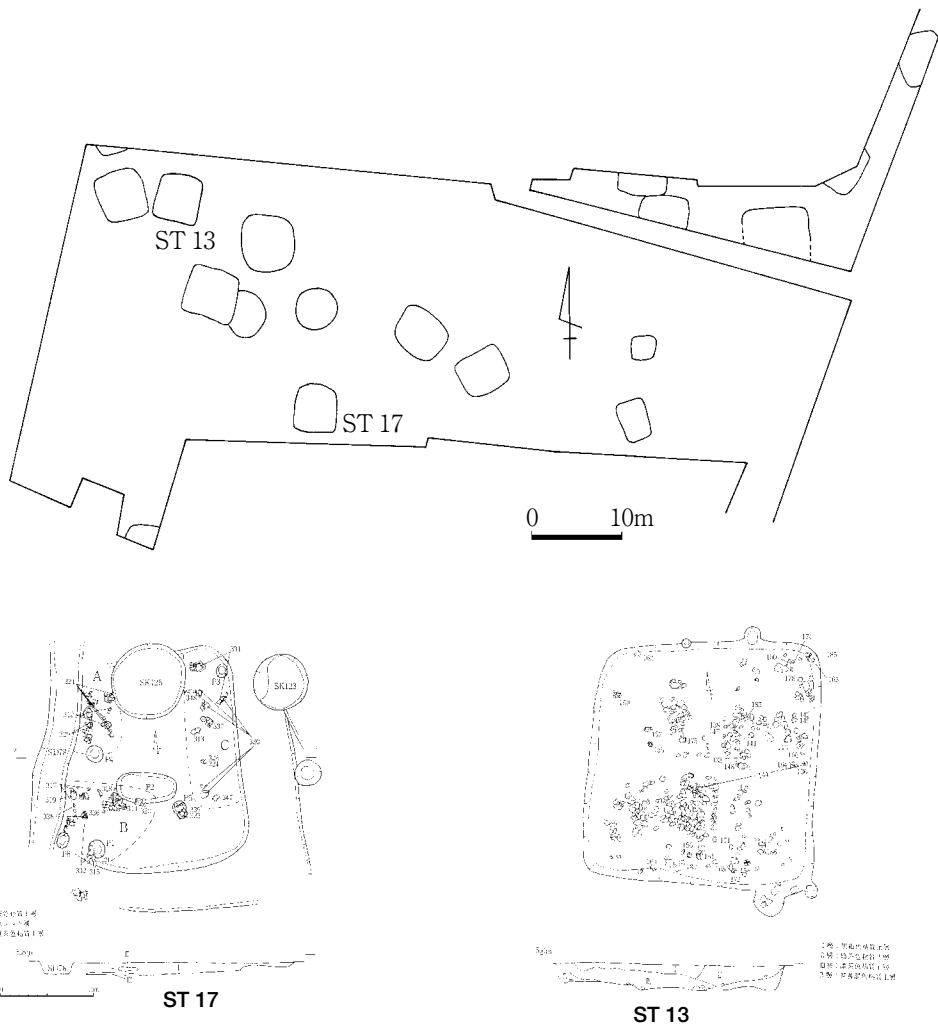


Fig.22 小籠遺跡竪穴住居址分布図及びST17・13平面、セクション図

て一定の秩序、或いは単位の存在を示唆している。また甕はすべて焼けている。

ⅢB型態はST13が該当する。ST13は一辺5m前後の方形プラン呈し南に開口するコ字状のベッド状遺構が存在する。古墳時代初頭に属する。ここからは、床面および埋土Ⅲ層中から大量の河原石と一緒に土器が出土している。河原石の大きさは拳大から人頭大のもので、河原石は当遺跡の基盤となっている低位段丘(長岡台地)礫層中にある円礫である。土器は口縁部の点数で見ると壺25点、甕61点、鉢88点、高坏30点、支脚10点を数える。個体数に換算すれば甕は10個体前後、鉢は20個体前後、高坏も10個体前後を数え、甕の大半は焼けている。完形を保った土器は床面と南側壁際に集中する傾向にあり、特に後者からは鉢4個体が完形品で出土している。意図的な埋置、埋め戻しの結果である。

(2) 東崎遺跡 (Fig.23)<sup>(6)</sup>

小籠遺跡から東に2kmの地点に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする集落址である。14棟の竪穴住居址が検出されており、ⅢA型態が1例(ST6)、ⅢB型態が3例(ST1・5・7)見られる。ⅢA型態のST6は、6.2×5.6~6.0mの方形プランを呈し、弥生後期末期(VI-1期)に属す

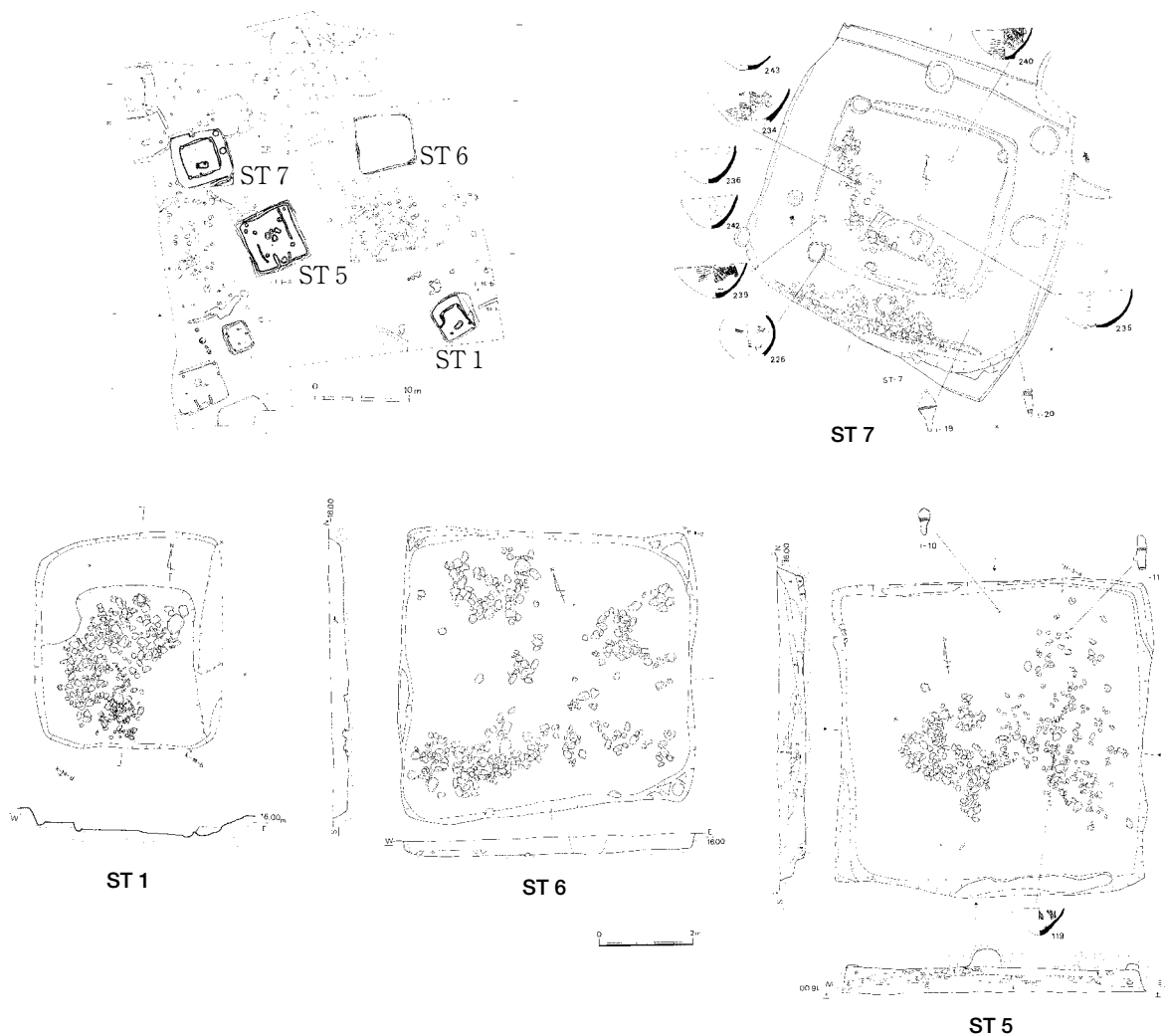


Fig.23 東崎遺跡竪穴住居址分布図及びST1・5~7平面、セクション図

る。床面から6~18cm浮いた状態で円礫が多量に出土しているが、集石は西南、西北、北東部の3群に大きく分かれる傾向にある。西南コーナー部の集石が最も大きく、ついで西北部のものが大きい。円礫の中には被熱赤変しているものも見られる。集石間及び床面から20個体以上の甕を中心に鉢、壺、高坏、支脚、土玉が出土し、この他鉄鏃片を含む5点の鉄器片も出土している。なおST6は床面に中央ピット、柱穴などの遺構が認められない。住居址として機能した遺構であるかどうか問題が残るが、集石や土器等の遺物出土状況は廃絶住居と同様のあり方を示している。

ST1は4.1×4.5mを測るやや小振りの方形竪穴住居で、北側と東側にベッド状遺構を有する。古墳時代前期初頭に属する。住居址中央部に2.2×3.2mの範囲内で多量の円礫の集石が見られる。集石は床面より浮いており中には被熱赤変したものもある。集石間より甕を中心とする多量の土器と共に2点の鉄鏃が出土している。報告者は「集石+土器類+鉄器を用いた廃棄行為が復元」されたとし「住居跡廃絶に伴う埋没祭祀が考えられる」としている。

ST5は6.7×6.5mの方形住居で、古墳時代前期初頭に属する。住居址の中央部に多量の円礫の集

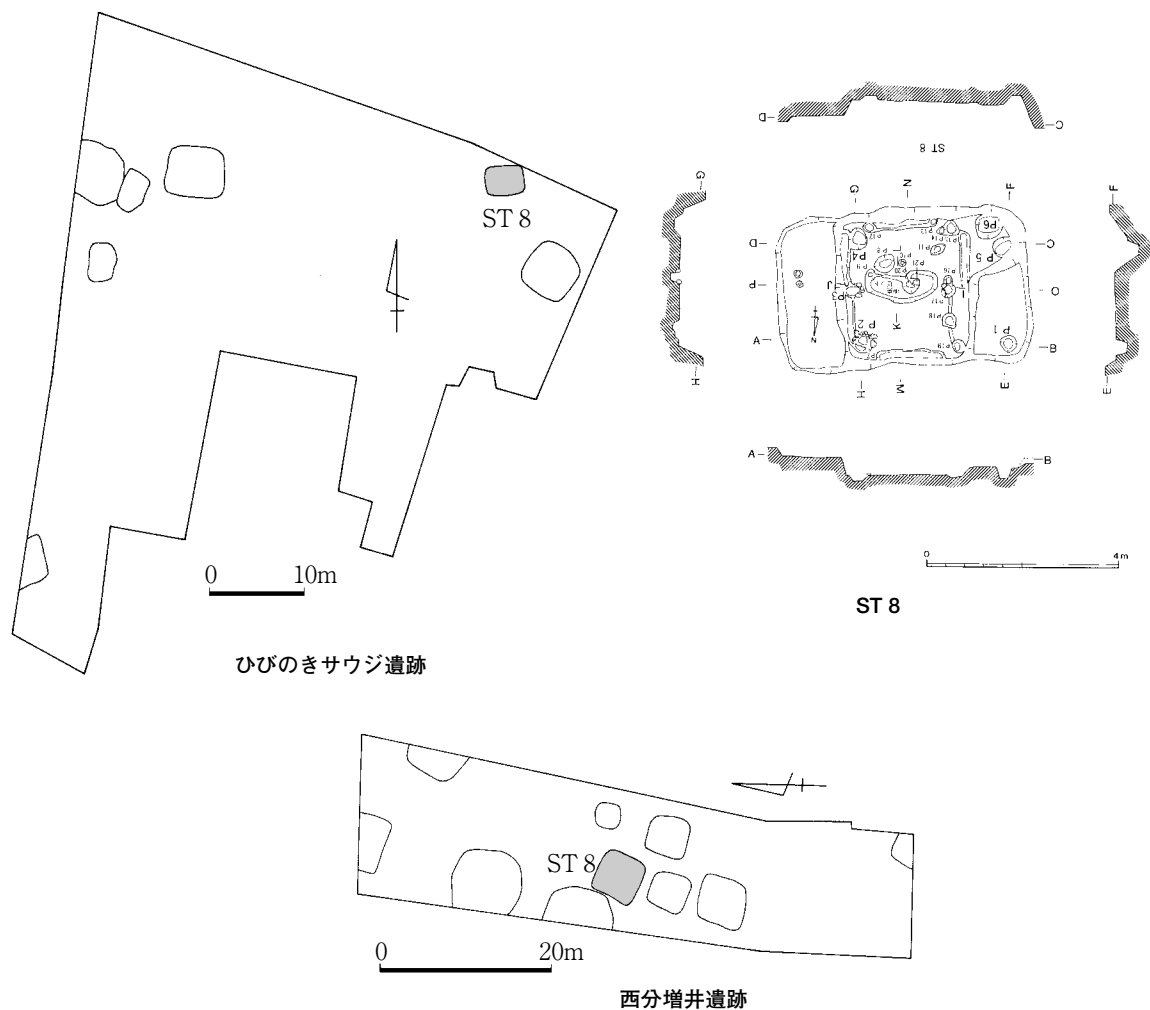


Fig.24 ひびのきサウジ遺跡竪穴住居分布図・ST8平面図及び西分増井遺跡竪穴住居分布図

石と集石間から甕9個体、鉢10個体、高坏8個体、壺、支脚などと共に鉄鏃とヤリガンナが1点づつ出土している。集石には被熱赤変したものも認められる。この他床面からも鉢を主体に甕、高坏、壺などが見られ、鉄器も手鎌、鋤先、鉄鏃が出土していることから、床面と床面から浮いている集石との2段階の行為が復元されよう。

ST7は、一辺6.4mの方形プランの住居址でベッド状遺構が全周する。弥生後期終末期(VI-2期)に属する。ここからは、南壁側のベッド状遺構と低床部から帯状の集石が検出されている。後者の集石中からは鉢4個体が出土しており、他の地点からも甕と鉢を中心に30個体近くの土器と鉄鏃2点が出土している。以上4つの住居址から出土した円礫は、小籠遺跡例と同様に基盤層のものである。当遺跡における集石や多量の遺物出土について、報告者である山本哲也氏は「住居跡廃絶にあたって土器の使用(煮沸行為による共同飲食もしは供献)と破碎・鉄器の供献を伴う祭祀儀礼が行われた可能性が指摘される。」とし、「集落の共同作業としての解体等が行われ、祭祀儀式も集落内の共同祭儀であった可能性が高い。」ことを指摘している。



### (3) ひびのきサウジ遺跡 (Fig.24)<sup>(7)</sup>

香美郡土佐山田町百石に所在し、物部川右岸の低位段丘上に立地する。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の竪穴住居址7棟と壺棺墓9基などが検出されている。近接するひびのき遺跡においても同時期の竪穴住居址が6棟検出されており、高知平野北部における中心的な集落を形成していたものと考えられる。ここからは竪穴住居ST8からI型態が1例見られた。ST8は、5.3×3.2mの長方形プランを呈する小型住居で東西壁にベッド状遺構を持っている。時期は後期末(VI-1期)に属する。床面を中心に甕30個体以上、鉢20個体以上、壺10個体前後、高坏10個体以上、鉄鎌1点、砥石3点、土錘1点が出土している。大量の土器について報告者は「出土した土器は、投げ込まれたのではなく据え置かれたと考えられる」とし、祭祀的性格を指摘している。土器は完形品または完形復元できるものが多く、甕の大半は外面が煤けている。甕の1点は搬入品の下川津B類土器も見られる。

### (4) 金地遺跡 (Fig.25)<sup>(8)</sup>

南国市金地に所在する。弥生時代後期末(VI-2期)の住居址2棟(ST1・2)が検出されており、ともにⅢB型態に属する。ST1は一辺5.3mの隅丸方形プランをなし4面にベッド状遺構が巡っている。高床部から床面中央部に向かって多量の円礫が検出された。集石と混在して甕20個体以上、鉢20個体以上、壺、支脚、手捏土器が出土している。甕はほとんど例外なく煤けている。同時期のST2も同様な状況を示している。

### (5) 西分増井遺跡 (Fig.24)<sup>(9)</sup>

高知平野西部の吾川郡春野町西分に所在する。縄文時代後期から古代にかけての複合遺跡で仁淀川下流域の拠点集落として位置付けられている。中心は弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあり、当該期の竪穴住居址10棟が検出されている。その内の1棟ST8にI型態が認められる。ST8は一辺5.3mの方形プランを呈し古墳時代前期初頭に属する。床面中央部から北西コーナー部に向かってコンテナ26箱分の大量の遺物が集中出土した。甕と鉢は20個体以上、高坏10個体以上、ミニチュア土器4点、壺などが出土している。吉備、河内、阿波からの搬入土器も複数個体見られる。

### (6) 林田遺跡 (Fig.25)<sup>(10)</sup>

香美郡土佐山田町林田に所在し物部川左岸の低位段丘上に立地する。林田遺跡は地点を異にしてこれまで3回の調査が実施されており、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の竪穴住居16棟が検出されている。1999年調査区(I区)でII型態が1例(ST2)、ⅢB型態が1例(ST6)、2000年調査区(Ⅲ区)においてⅢB型態が1例(ST4)見られた。Ⅲ区のST4については本文中で述べた通りである。II型態を示すI区ST2は、直径5.6mの比較的小型の円形住居址で弥生後期末(VI-1期)に属する。住居址中央部から南部にかけてと東よりの部分の2群に分かれて大量の土器が集中出土している。これらの土器は、床面からの出土はなく20cmほど浮いたところに集中している。甕が圧倒的に多く、次いで鉢、壺、高坏で、ミニチュア、鉄鎌も1点出土している。甕のなかで煤けているものは2割程度である。これらの土器は、住居址が床面から20cm程埋め戻された後に廃棄されたもので

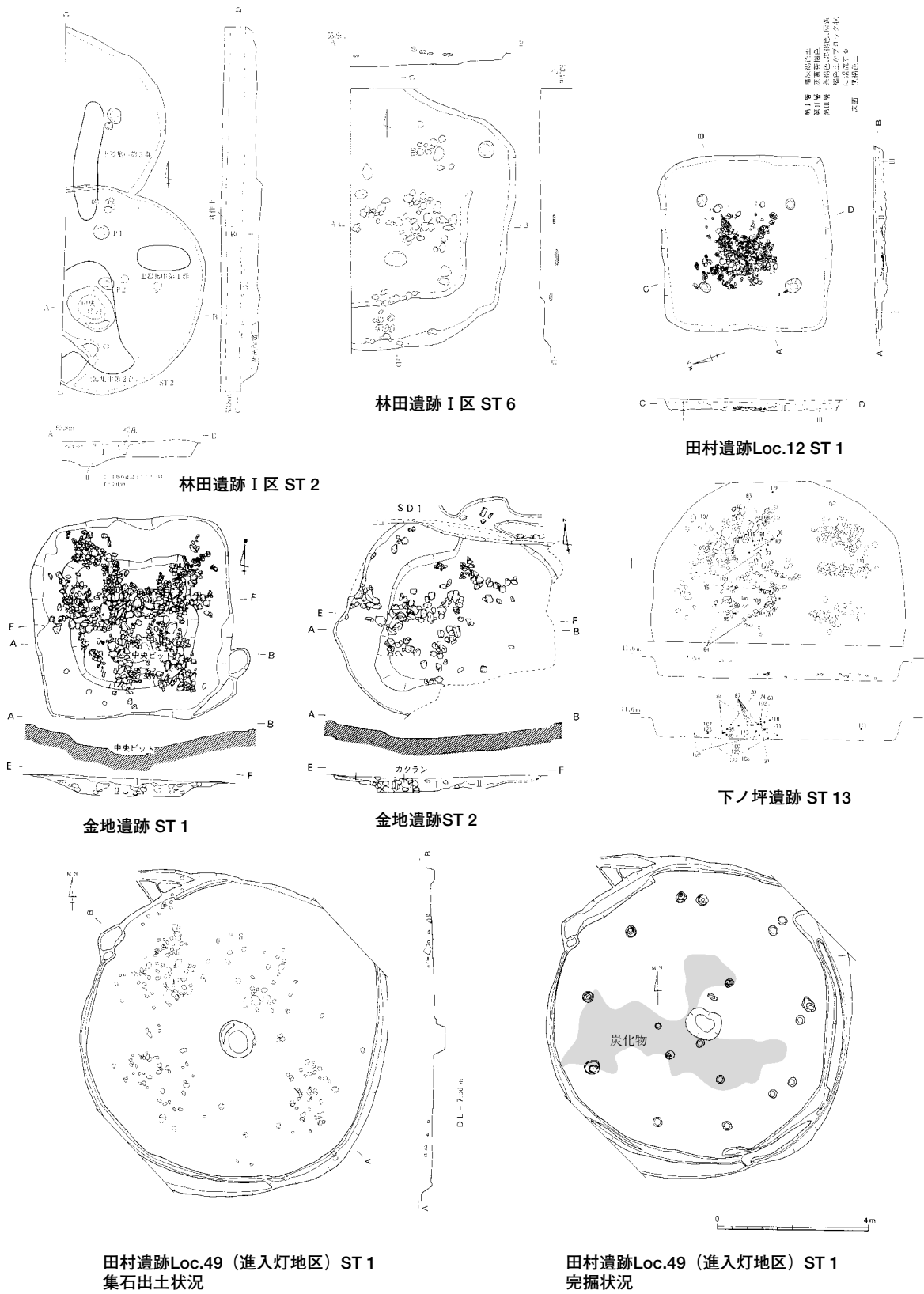


Fig.25 林田遺跡・田村遺跡・金地遺跡・下ノ坪遺跡の竪穴住居平面図

ある。

ⅢB型態のST 6 は、一辺が4.4m前後、径7.4m程の五角形ないしは六角形の平面形を呈し、南壁側にベッド状遺構を持つ。古墳時代前期初頭に属する。住居址の中央部を中心に床面から10cm程浮いた状態で多量の円礫が出土している。土器は特に集中する傾向は認められないが、埋土中から甕と鉢が10個体ほど、壺と高坏が数点出土している。

#### (7) 田村遺跡 (Fig.25)

南国市田村に所在する。弥生時代においては、前期～後期の竪穴住居址430棟が検出されており、西日本屈指の拠点集落として位置付けられる。Ⅰ型態とⅢA型態が一例ずつ見られた。Ⅰ型態はLoc.12のST 1 が該当する。ST 2 は4×4.2mの方形住居で後期末(VI-2期)に属する。床面中央部に40～50cmの焼土の広がりがあり、焼土を中心として4本の柱穴に囲まれた範囲の中から多量の土器と炭化材が重なるように出土し、炭化材の中には板状のものもあり土器の上に被さるような状況を呈するものもある。甕30個体以上、鉢10個体以上が出土しており壺は少ない。また本例には中央ピットが存在しない。<sup>(11)</sup>

ⅢA型態は進入灯部分(Loc.49)のST 1 が該当する。ST 1 は、直径8.4mの円形住居址で後期中葉(V-3期)に属する。床面から浮いた状態で大小300個以上の円礫が、4ブロック程に分かれて出土している。土器の出土は少なく集中傾向も見られない。床面には炭化物・焼土塊の広がりが認められる。<sup>(12)</sup>

#### (8) 下ノ坪遺跡 (Fig.25)<sup>(13)</sup>

香美郡野市町下ノ坪に所在する。物部川下流域の左岸の沖積低地に立地し、弥生後期前葉と古代に盛行期がある。弥生後期前・中葉の竪穴住居址12棟が確認されているが、遺跡の広がりから見て50棟以上を擁する集落址で、右岸に展開する田村遺跡の衛星的集落の一つとして位置付けることができよう。ここからはST13からⅢA型態が検出されている。ST13は直径7mを測る円形住居址で後期前葉に属する。集石は4つの群に分けることができる。西半分には3×3.6mの河原石の大きなまとまりがあり、東半分には3つの小群がある。これらの集石は床面から浮いており、住居の埋め戻しの過程で置かれたものである。床面出土の遺物は石包丁2点と壺底部1点のみで、多くは西側の集石間から出土している。集石と同時に置き去られたものであろう。

## 2 廃絶型態の検討

以上、竪穴住居廃絶に伴う円礫や土器等の集中出土について、本文中も含めて8遺跡16棟の事例を紹介した。これらの事例は、全て竪穴住居の機能停止後、屋根や柱などの建築機材を解体除去した後に実施された意識的な行為であると考えられる。廃絶パターン of 型態別内訳は、Ⅰ型態が4例、Ⅱ型態が1例、ⅢA型態が3例、ⅢB型態が8例である。以下、冒頭に紹介した青木氏の分析との比較をも行いながら各型態の検討やこれらの住居址の位置付けについて考えてみたい。

Ⅰ型態とⅡ型態はともに多量の土器を用いた廃絶型態であるが、廃絶行為の過程に大きな違いがある。すでに述べたようにⅠ型態は床面に多くの土器を埋置した後に埋め戻している。小籠遺跡ST17やひびのきサウジ遺跡ST 8、田村遺跡Loc.12のST 1、西分増井遺跡ST 8 が該当し、出土状

況について「据え置かれた」という表現にも示されるように土器の遺存状況が極めて良好であることが特徴である。「土器埋置型態」と呼称しておきたい。一方、Ⅱ型態は堅穴住居址を一定の深さまで埋め戻した後に大量の土器を廃棄している。土器の遺存状態はⅠ型態ほどに良好でなく接合復元できる資料も少ない。「土器投棄型態」とする。両者の違いは出土状況だけでなく、使用方法にも現われている。すなわちⅠ型態は甕のほとんどが煤けているのに対して、Ⅱ型態ではそれほど顕著ではない。廃絶の内容・目的に根差した差違として解釈することも可能であろう。

Ⅲ型態については集石の意味を追究しなければ成らないが現段階においては有効なアプローチの方法を見出し得ない。ただⅢA型態とⅢB型態とでは時期的な違いを指摘することは可能である。すなわちⅢB型態が全て弥生後期末(Ⅵ-2期)と古墳時代初頭であるのに対して、ⅢA型態は、下ノ坪遺跡ST13が後期前葉、田村遺跡Loc.49のST1が後期中葉、東崎遺跡のST6が後期末(Ⅵ-1期)に属しており全て古相を示している。ⅢA型態→ⅢB型態の変遷が想定される。「集石A型態」、「集石B型態」とする。なおこの型態は、床面で行われる場合が少ないことからⅡ型態との共通点を持っている。

今回紹介した16事例は、使われている土器の多さや鉄器等も伴うことから青木氏のパターンD類、すなわち「複数の構成員による共飲共食儀礼行為の結果」に近いと思われる。しかしパターンD類は「火焚き」を伴うことが重要な要件となっており、高知平野の諸例とは異なる。東崎遺跡の集石の一部に被熱したものが含まれており、田村遺跡Loc.12のST1には炭化材も土器と共に出土しているが、現状ではこれらは例外的である。現状においては、廃絶住居の中で「火焚き」が行われたことを積極的に証明する痕跡は認められない。次にこれらの廃絶住居址の各集落における位置付けについて少し触れておきたい。各廃絶型態は、特別に大きな面積や特別の施設を持つ堅穴住居ではなく、極一般的な住居において行われているおり、僅かに田村遺跡Loc.49のST1が大型住居に属するのみである。パターンD類が集落の中で最も大きな住居やそれに準ずる大型住居で行われるのとは異なるところである。

### 3 まとめ

高知平野の弥生後期末から古墳時代初頭に顕在化する大量の土器と集石による堅穴住居廃絶の型態を「土器埋置型態」、「土器投棄型態」、「集石A型態」、「集石B型態」として捉えた。各型態はその性格や目的、背景を異にするものと思われるが、その具体像について迫ることは現状では難しい。しかしすでに先学の指摘のように、これらに使われた甕や鉢を中心とする大量の土器は、複数の堅穴住居から構成される共同体員の行為としてなされたことを物語っていよう。そして同時に祭祀的、儀礼的な側面を有していたことも十分考えられることである。「埋置型態」顕著な甕の煤けは共飲共食儀礼の後の埋納的行為である可能性は十分考えられる。

このような堅穴住居の廃絶行為が、現状では弥生時代後期中葉から散見されはじめ、後期末から古墳時代初頭に盛行期を迎える。高知平野において拠点集落であった田村遺跡が劇的な解体を遂げ、集落の再編が進行する時期に生じた現象であるだけに興味深いものがある。

註)

- 1)出原恵三「第Ⅳ章まとめ」『林田遺跡Ⅰ』(財高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年)
- 2)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡Ⅱ』(財高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年)
- 3)青木一男「箱清水期における土器廃棄のⅠ様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要7』長野県埋蔵文化財センター1999年
- 4)山本哲也『東崎遺跡Ⅰ』(財高知県文化財団1991年)
- 5)註2)に同じ
- 6)註4)に同じ
- 7)高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県土佐山田町教育委員会1990年
- 8)吉原達成『金地遺跡』南国市教育委員会1992年
- 9)出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会1990年
- 10)出原恵三・小嶋博満『林田遺跡Ⅰ』高知県土佐山田町教育委員会2002年
- 11)下村公彦・島崎富規「loc.12」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会1986年
- 12)出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)報告書ー田村遺跡群ー田中地区』高知県教育委員会1986年
- 13)小松大洋・出原恵三・池澤俊幸『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会1998年

## 第V章 まとめ

林田遺跡は、1983年以来、3回にわたる調査が実施されてきた。その結果、縄文時代晩期から近世に及ぶ複合遺跡であることが明らかとなっている。今次調査では、新たに弥生後期終末期の竪穴住居址4棟をはじめ近世火葬墓(SK10)、古代・中世の遺構・遺物も僅少なながら検出した。今次調査の成果は、これまでの林田遺跡の評価や内容に変更を迫るものではなく従来の成果を踏襲するものであった。その中でSK10の近世火葬墓は本県においては初めての検出例であり、近世の墓制を考える上で今後注目されよう。

林田遺跡の全体の流れについては『林田遺跡 I』<sup>(1)</sup>において述べたところであり、ここでは当遺跡の盛行期である弥生時代後期から古墳時代初めの集落の動向と高知平野における林田遺跡の位置付けを行ってまとめとしたい。当遺跡では、合計16棟の竪穴住居址を検出し15棟を調査している。これらについて時期別に整理すると、後期中葉が2棟(I区のST3・7)、後期後葉が2棟(I区のST2・5)、後期終末が10棟(83年次調査のST1～4、I区のST1・4、Ⅲ区のST1～4)、古墳時代初頭が1棟(I区のST6)である。林田遺跡は、後期中葉に集落としての営みを開始し、後期終末期に盛行期を迎え、古墳時代に入ると急速に衰退し消滅してしまう。

高知平野の弥生集落は拠点集落である田村遺跡を核として展開するが、後期前・中葉をピークに田村遺跡は急速に消滅・解体に向かう。この前後から周辺部に小集落が点在しはじめ後期終末に盛行期を迎えるようになる。古墳時代前夜に高知平野では集落の再編成が進行するのである<sup>(2)</sup>。新たに登場する集落を物部川流域に求めれば対岸のひびのき遺跡<sup>(3)</sup>、ひびのきサウジ遺跡<sup>(4)</sup>、岩村遺跡<sup>(5)</sup>、高知平野の中央部では小籠遺跡<sup>(6)</sup>、東崎遺跡<sup>(7)</sup>などを挙げるができる。林田遺跡もこのよな動向の中で成立、展開した典型的な例として捉えることができる。これらの集落は、立地が変わるだけでなくそれまでには見られなかった幾つの特徴を持っていることが知られている。先ず鉄器を多く持つことが挙げられよう。83年次調査のST2からは鉄鎌、ヤリガンナなど14点の鉄器<sup>(8)</sup>が、I区からも鉄鎌、鉄斧、摘み鎌など5点の鉄器が出土している。後期終末期に見られる飛躍的な集落規模の拡大は鉄器の普及と密接な関連があろう。先に挙げた竪穴住居廃絶時の諸行為の盛行もその一つである。

遺構においても大きな変化が進行する。全体的な流れとしては、竪穴住居址の平面プランは後期後葉まで円形が主流であったが終末期になると隅丸方形に転換し、古墳時代に入ると方形に変わる。ベッド状遺構が急速に広がるのもこの時期の特徴である。また住居の規模では、床面積40m<sup>2</sup>以上の大型住居址が急速に減少しはじめ、30m<sup>2</sup>前後の比較的均等は住居址が普及する傾向にある。遺構に現われたこれらの変化は、おそらく構造的な変化も同時に進行していったことが想定される。しかし林田遺跡では、すでに触れたように60m<sup>2</sup>を超える大型住居址が2棟あり、新しいタイプの隅丸方形竪穴住居も認められない。伝統的な円形プランが主流である。このような特徴を持つ集落址は拝原遺跡や稗地遺跡にも見られる。このことは、古墳時代前夜に生じた集落の再編成が一律に進行したのではなく、伝統的な諸特徴を保ちながら展開している集落のあることを示している。

註)

- 1)出原恵三・小嶋博満『林田遺跡Ⅰ』(財高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年)
- 2)出原恵三「古墳から弥生へー前期古墳空白地域の動向」『考古学研究』第40巻2号考古学研究会1993年
- 3)岡本健児・広田典夫『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会
- 4)高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県土佐山田町教育委員会1990年
- 5)三谷民雄『岩村遺跡Ⅳ』高知県南国市教育委員会1999年
- 6)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡Ⅱ』(財高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年)
- 7)山本哲也『東崎遺跡Ⅰ』(財高知県文化財団1991年)
- 8)森田尚宏『林田遺跡』高知県土佐山田町教育委員会1985年

表1 遺物観察表1

図版番号	出土地点	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特徴	備考
1	ST 1	壺		13.0			チャートの粗粒砂を多く含む	橙色	二重口壺。外面縦ハケ、口縁外面横ナデ。	
2	〃	〃		16.2			〃	〃	口唇部は上、下に摘み出し強い横方向のナデ調整口縁部外面タテ、内面横ハケ。	
3	〃	甕		13.2			〃	暗灰黄色	叩き成形。口縁部、胴部外面縦ハケ、口縁部内面横方向のナデ調整。	外面煤け。
4	〃	鉢		11.0			〃	にぶい黄橙色	口縁端部丁寧な横ナデ調整。体部外面縦ハケ、内面指ナデ。	外面下半に黒斑。
5	〃	〃		15.4			チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	〃	口縁部僅かに外反。外面横方向のハケ、口内面横方向のハケ、体部内面ナデ調整。	外面煤け。
6	〃	壺底				5.3	チャートの粗粒砂を多く含む	〃	外面縦ハケ、内面右下がりハケ+縦方向指ナデ。	二次的に被熱赤変、一部剥離。
7	〃	底部					〃	〃	叩き成形。内面ナデ調整。	内外面二次的に被熱赤変。
8	ST 2	壺					チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	橙色	外面縦ハケ、内面横ナデ。	
9	〃	〃		25.0			チャートの粗粒砂を含む。	〃	口を上下に拡張。口縁部内外面横方向の強いナデ調整。頸外面縦ハケ。	
10	〃	鉢	8.6	22.5	4.7		〃	〃	口縁端部を僅かに外方に摘み出し横ナデ。外面底部から下胴部に大きな木葉圧痕あり。	
11	〃	〃				1.0	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	〃	外面縦ハケ、内面ナデ。	
12	〃	底部				7.0	チャートの粗粒砂を含む。	暗灰黄色	〃	外面煤け。
13	〃	〃				5.0	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	橙色	叩き成形。外面左下がりハケ調整、内面ナデ。	外面に黒斑あり。
14	ST 3	壺					〃	〃	口縁部を上下に拡張し、3条の弱い凹線文を配す。内外面横ナデ。	
15	〃	鉢	5.6	10.9	3.6		チャートの粗粒砂を含む。	にぶい橙色	叩き成形。内面縦ハケ、外面ナデ調整。口唇面取り。	
16	〃	鉢底				3.7	〃	〃	叩き成形。内面右下がりのハケ。	外面に黒斑あり。
17	〃	鉢	5.1	12.8	3.3		〃	〃	内面右下がり、蜘蛛の巣状のハケ調整。口唇面取り。	
18	〃	高坏		19.1			チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	橙色	口縁端部を下方に摘み出し強い横ナデ。内外面ナデ調整。	
19	〃	〃		20.6			〃	〃	口唇幅広い面取り。内外面ナデ調整。外面はヒビ割れ状の亀裂が多く見られる。	
20	〃	甕底				3.0	チャートの粗粒砂を含む。	黄灰色	叩き成形。内面ナデ調整。	
21	〃	弥生土器底部				3.6	チャートの細、粗粒砂を含む。	にぶい黄橙色。	〃	
22	〃	〃				4.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	にぶい橙色。	叩き成形。外面縦ハケ、内面ナデ調整。	
23	〃	〃				6.0	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	灰黄褐色	内外面ナデ調整。	
24	〃	弥生土器甕		13.5			チャートの粗粒砂、長石細粒砂を含む。	にぶい橙色	叩き成形。口縁部内外面横ハケ。胴部内面縦ハケ+縦方向指ナデ。	
25	〃	〃				2.8	チャートの粗粒砂を多く含む。	にぶい黄橙色。	叩き成形。外面は右上がりの螺旋状叩き+縦ハケ。内面縦方向の指ナデ。	外面煤け。
26	〃	〃				3.0	〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ、内面縦方向の指ナデ。	〃
27	〃	弥生土器底部					〃	にぶい褐色	叩き成形。内面縦ハケ+ナデ調整。	〃
28	〃	弥生土器鉢底部				4.9	〃	橙色	内面右下がりハケ+ナデ調整。	



表2 遺物観察表2

図版番号	出土地点	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特徴	備考
29	ST 3	弥生土器 甕					チャートの粗粒砂を多く含む。	にぶい黄橙色。	叩き成形。口縁内面横ハケ、胴部内面縦方向ナデ調整。	
30	〃	須恵器 壺					長石他の粗粒砂を多く含む。	灰色	胴部外面に断面蒲鉾状の突帯が巡る。外面は綾杉状の叩き。	
31	〃	須恵器 坏				10.4	精選された胎土	〃	外底は削り+ナデ、内外面丁寧な横ナデ。高台高0.5cm	
33	ST 4	弥生土器 壺		14.8			チャートの粗粒砂を多く含む。	橙色	口唇面取り。内外面調整不明。	
34	〃	〃		18.0			〃	〃	口縁部を上へ拡張し強い横ナデ。	
35	〃	弥生土器 甕		15.0			〃	にぶい橙色	叩き成形。外面縦ハケ、口縁内面横、胴部内面右下がりのハケ+ナデ調整。	外面煤け。
36	〃	〃		15.1			〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ、口縁および胴部内面右下がりハケ+ナデ調整。	〃
37	〃	〃		15.0			〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ。口縁内面横、胴部内面右下がりのハケ。口唇面取り。	口縁部外面煤け。
38	〃	〃		12.5			〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ、内面ナデ調整。口唇面取り。	外面煤け
39	〃	〃		13.7			チャート、頁岩の粗粒を含む。	橙色	叩き成形。口縁外面縦、内面横ハケ調整。胴部内面右下がりハケ、指頭圧痕顕著。口唇を摘み出し強い横ナデ調整。	
40	〃	〃		16.4			チャートの粗粒砂を多く含む。	にぶい橙色	叩き成形。口縁外面縦、内面横方向のハケ。胴部外面縦、内面右下がりのハケとナデ調整。口唇を摘み出して横方向に強くナデ調整。	外面煤け。
41	〃	〃		21.0			〃	灰褐色	叩き成形。外面縦方向、口縁内面横、胴部内面右下がりのハケ+ナデ調整。口縁端部を摘み出し強くナデ調整。	〃
42	〃	〃		16.9			〃	〃	叩き成形。口縁部内面横、外面縦方向のハケ。胴部外面縦、内面は右下がりのハケとナデ調整。口唇は外方に摘み出して強いナデ調整。	〃
43	〃	〃		22.0			〃	にぶい橙色	叩き成形。口縁部胴部外面縦方向、口縁部内面横、胴部内面右下がりハケ。口唇は外方に摘み出して横方向のナデ調整。	〃
44	〃	〃		18.4			〃	〃	叩き成形。口縁部外面縦、内面横方向のハケ調整。胴部外面縦ハケ、内面は下→上の削り+縦ハケ。	〃
45	〃	〃				5.0	〃	〃	内外面縦方向ハケ。	〃
46	〃	〃				4.8	〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ、内面縦方向の強いナデ調整。	
47	〃	〃			14.3	2.9	〃	〃	叩き成形。胴部外面縦ハケ、内面ナデ調整。下胴部の一部に黒斑あり。	
48	〃	〃			12.6	4.1	〃	〃	叩き成形。外面下半縦ハケ、内面上半右下がりハケ、下半は縦方向ナデ調整。	外面被熱赤変、煤け。
49	〃	〃				4.5	〃	〃	外面縦ハケ、内面縦方向のナデ調整。	〃
50	〃	〃				5.0	〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ、内面指ナデ。	外面煤け。
51	〃	弥生土器 底部				5.0	〃	にぶい黄褐色	外面縦ハケ、内面ナデ調整。	〃
52	〃	弥生土器 鉢				5.0	〃	にぶい黄褐色	叩き成形。内面横ハケ。外底～下胴部の一部に黒斑。	
53	〃	弥生土器 底部				4.5	〃	にぶい橙色	外面縦ハケ、内面右下がりハケ。	外面煤け。
54	〃	弥生土器 壺底部				5.6	〃	橙色	叩き成形。外面縦ハケ、内面ナデ調整。下胴部に大きな黒斑。	
55	〃	弥生土器 鉢				2.7	〃	〃	内外面丁寧なへら磨き。	
56	〃	〃		9.3			〃	にぶい黄褐色	口唇部を外方に摘み出しヨコナデ。内外面ナデ調整。	
57	〃	〃		13.6			〃	橙色	口唇面取り。外面ナデ調整、内面へら磨き。	
58	〃	〃		26.7			チャート、風化礫の粗粒砂を含む。	黄灰色	外面ナデ調整、内面ハケ+ナデ調整	

表3 遺物観察表3

図版番号	出土地点	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特徴	備考
59	ST 3	弥生土器鉢		29.6			チャートの粗粒砂、長石の細粒砂を含む。	橙色	口唇部、外面ナデ調整。内面ハケ+縦ヘラ磨き。	
60	〃	弥生土器壺		11.5			チャートの細粗粒砂を含む。	〃	口唇面取り。口頸部外面縦、内面横ハケ。	
61	〃	〃		18.6			チャートの粗粒砂を多く含む。	〃	口縁部は上下に拡張し強いヨコナデ。外面縦ハケ、内面横ヘラ磨き。	
62	〃	弥生土器甕		9.1			チャートの粗粒砂を含む。	浅黄色	外面右下がりハケ、内面ハケ+ナデ調整。	
63	〃	〃		10.7	11.2		〃	橙色	叩き成形。口縁内面横、胴部内面右下がりハケ+ナデ調整。胴部外面一部に縦ハケ。	
64	〃	〃		15.8			〃	にぶい橙色	叩き成形。口縁部内外横ナデ。胴部外面縦、内面右下がりのハケ。	外面煤け。
65	〃	〃			9.6	1.6	〃	〃	外面縦ハケ、内面ナデ調整。	
66	〃	〃				4.8	〃	にぶい黄橙色	叩き成形。外面縦ハケ、内面ナデ調整。	内外面被熱赤変。下胴部に黒斑あり。
67	〃	〃				3.5	〃	〃	叩き成形。外面縦ハケ、内面ナデ調整。	内外面被熱赤変。
68	〃	〃				3.9	チャートの粗粒砂、小礫を多く含む。	橙色	外面縦ハケ、内面縦方向の指ナデ。	外面に大きな黒斑。内外面被熱赤変。
69	〃	弥生土器鉢	4.2	8.4		2.4	砂粒を含まない。	褐灰色	内外面ナデ調整、外面はヒビ割れ状の亀裂。	
70	〃	弥生土器壺		13.7			チャートの細粗粒砂を多く含む。	橙色	二重口縁壺。内外面右下がりのハケ。口縁端部を摘み出し横ナデ。	
71	〃	弥生土器高坏		10.8			チャートの粗粒砂を多く含む。	にぶい褐色	外面縦ハケ+ナデ調整。	外面黒斑。
72	〃	〃	6.7	11.1		2.3	チャート赤色風化礫を多く含む。	にぶい黄橙色	外面ナデ調整、内面横、右下がりのハケ。	
73	〃	〃	8.7	21.2		4.3	チャート他の粗粒砂を多く含む。	橙色	口縁端部を摘み出して強い横ナデ。外面縦ハケ、内面丁寧なナデ調整。	
74	〃	弥生土器甕底部				4.7	チャートの粗粒砂を含む。	にぶい黄橙色	叩き成形。外面縦ハケ、内面指による縦方向ナデ調整。	外面被熱赤変、煤け。
75	〃	弥生土器壺底部				1.0	〃	灰黄褐色	外面ハケ、内面ハケ+ナデ調整。	
76	〃	弥生土器壺		15.0	28.6		〃	〃	叩き成形。口縁部は下端を摘み出し横方向に強いナデ、口唇は凹状を呈する。頸外面縦、内面横方向ハケ。胴部外面縦、内面右下がりハケ調整。	
77	〃	〃				26.2	〃	にぶい黄橙色	叩き成形。外面縦ハケ、上半は縦ヘラ磨き。内面右下がりハケ+縦方向ナデ調整。	外面中位に黒斑あり。
78	〃	〃				5.6	〃	にぶい橙色	外面縦ハケ+ナデ調整。内面ハケ+ナデ調整。	外底付近に黒斑あり。
79	〃	〃				30.6	〃	橙色	叩き成形。外面縦ハケ、内面右下がりハケ。	
82	〃	弥生土器高坏		19.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	〃	内外面横ナデ調整。	
83	〃	土師器坏		6.2			チャートの粗粒砂、小礫を含む。	にぶい黄橙色	〃	
84	〃	〃	2.5	10.0		6.6	精選された胎土。	〃	内外横ナデ調整。ヘラ切り。	
85	〃	〃				6.6	〃	〃	内外横方向のナデ調整。糸切り。	
86	〃	〃				8.6	〃	橙色	〃	
87	〃	青磁碗		17.0			灰色精緻。	釉は灰色	外面鎚蓮弁文。	
88	SK 4	須恵器碗		15.7			精選された胎土。	にぶい黄橙色	内外面横ハケ+横ヘラ磨き。	

表4 遺物観察表4

図版番号	出土地点	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特徴	備考
89	SK7	土師器 皿				高台径 21.6	精選された胎土。	にぶい橙色	高さ0.8cmのしっかりした高台。内外面丁寧な横ナデ調整。底部からの立ち上がりは鋭く屈曲。	
90	〃	瓦器鍋		21.6			チャートの粗粒砂を多く含む。	灰色	口縁下1.5cmに断面台形の鐳が巡る。内外面横ナデ調整。口唇面取り。	
91	P44	弥生土器 壺			20.6	6.1	チャート、他の粗粒砂を多く含む。	明赤色	叩き成形。外面縦ハケ、内面指ナデ、指頭圧痕顕著。	
92	P6	弥生土器 甕		16.6			チャートの粗粒砂を含む。	にぶい黄橙色	叩き成形。口縁部外面縦ハケ、内面横ハケ。胴部内面横ハケ+縦方向ナデ。口唇面取り。	外面煤け。
93	SD2	〃				6.2	チャートの粗粒砂を多く含む。	橙色	叩き成形。内外面ハケ調整。	〃
94	P6	土師器 甕		21.0			チャート、他の粗粒砂を多く含む。	にぶい黄橙色	内面右下がりハケ。	〃
95	〃	弥生土器 甕				5.7	〃	橙色	叩き成形。外面縦ハケ。内面縦ナデ。	外面被熱赤変
96	P108	土師器 小皿	1.5	6.0		4.5	精選された胎土。	にぶい橙色	内外面横ナデ。糸切り。	
97	P83	〃	1.6	6.6		4.8	〃	〃	〃	
98	P105	〃	1.7	6.1		3.9	〃	橙色	〃	
99	P112	土師器 坏				7.8	〃	〃	〃	
100	P46	〃		12.4			〃	淡黄色	内外面横ナデ。	
101	P80	須恵器 坏				高台径 8.0	〃	灰黄褐色	内外面丁寧なナデ調整。	
102	P116	土師器 椀				6.2	〃	灰白色	円盤状高台。糸切り底。内外横ナデ調整。	
103	P100	瓦質土器 鍋		24.4			〃	灰色	内面及び口縁部外面横ナデ調整。外面指頭圧痕顕著。	
105	P105	土師器 鉢		22.6			石英、チャートの粗粒砂を多く含む。	橙色	東播系須恵器鉢の模倣品。内外面ナデ調整。	
106	P29	土師器 羽釜		26.0			チャート、石英の粗粒砂、長石細粒砂を含む。	〃	口縁部外面に幅1.5cmの鐳が巡る。内外面全面横ナデ。	外面煤け
107	P46	土師器 竈		27.3			チャート、石英他の粗粒砂を多く含む。	灰黄褐色	口縁部下5cmのところ幅5cmの大きな鐳が巡る。たき口の窓は水平に切られている。内外面横ナデ。	全面煤け
108	P105	瓦質土器 鉢		36.4			チャート、他の粗粒砂を多く含む。	灰色	口縁部端部は上に摘まみ上げ横ナデ、体部内外横ナデ。	
109	〃	瓦質土器 片口		27.6			〃	〃	口唇面取り。外面に指頭圧痕顕著。	
110	包含層	弥生土器 壺		19.6			チャートの粗粒砂を多く含む。	にぶい橙色	口縁部を横方向に強くナデ、僅かに上に拡張、口唇部は凹状。口内面に黒斑。	
111	〃	弥生土器 蓋		18.8			〃	橙色	口縁部内外横ナデ、外面縦、内面横ハケ。外面の一部に黒斑あり。	
112	〃	弥生土器 鉢	8.3	5.0		2.5	長石の細粒砂を含む。	にぶい黄橙色	外面縦ハケ、内面上部横ハケ、外面に大きな黒斑あり。	
113	〃	弥生土器 甕		20.6			チャートの粗粒砂を含む。	灰黄褐色	叩き成形。外面ナデ、内面右下がりハケ。内外面指頭圧痕顕著。	内外面煤け
114	〃	弥生土器 壺底部				6.0	チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。	にぶい橙色	外面ナデ、内面縦ハケ+ナデ調整。	
115	〃	弥生土器 甕底				4.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	〃	叩き成形。	内外被熱赤変
116	〃	弥生土器				4.6	〃	〃	外面縦、内面ナデ調整。	
117	〃	須恵器 坏				高台径 7.8	精選された胎土。	灰色	内外面丁寧な横ナデ。	
118	〃	須恵器 蓋		12.8			〃	〃	口縁部端部を下方に摘み出し強い横ナデ。天井部外面横ナデ。	

表5 遺物観察表5

図版番号	出土地点	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	特徴	備考
119	包含層	須恵器 蓋		13.4			長石細粒砂を含む。	灰色	口縁部端部を下方に摘み出し丸く納める。 口縁部内面1.5cm幅丁寧な横ナデ。	
120	〃	須恵器 坏		14.5			精選された胎土。	〃	内外面丁寧な横ナデ。	
121	〃	〃		14.4			〃	〃	〃	
122	〃	〃		14.4			長石細粒砂を含む。	〃	〃	
123	〃	土師器 坏	3.3	10.3		6.1	精選された胎土。	橙色	ヘラ切り。内外面横ナデ。	
124	〃	土師器 椀				高台径 9.8	赤色風化礫を含む。	〃	断面三角形の高台。内外面横ナデ。	
125	〃	青磁 皿				高台径 5.6	灰色精緻な胎土。	釉調は薄緑	稜花皿。釉は高台外面までかかる。	
126	〃	土師器 坏		12.2			精選された胎土。	にぶい橙色	内外横ナデ。	
127	〃	〃				10.0	橙色	〃	糸切り。内外横ナデ。	
128	〃	〃				高台径 5.2	赤色風化礫の細、 粗粒砂を含む。	にぶい橙色	内外横ナデ。高台高1.5cm。	
129	〃	須恵器 椀				6.2	精選された胎土。	灰黄色	円盤状高台。糸切り。内面横ナデ。内外面 火襷。	
130	〃	青磁 椀		15.2			灰色精緻	釉調は緑濁色。	外面鎬蓮弁文。貫入。	
131	〃	〃		17.0			〃	釉は薄緑色。	外面鎬蓮弁文。	
132	〃	〃		15.6			白色精緻	〃	口縁部外面に2本の圈線。貫入。	
133	〃	瓦質土器 鍋		22.0			チャート、他の細 粗粒砂を含む。	黄灰色	口縁部下に断面三角の突帯。外面横ナデ、 内面横ハケ。	
134	〃	須恵器 椀				7.6	〃	灰白色	円盤状高台。糸切り、横ナデ。	
135	〃	東播系須 恵器 鉢		27.8			チャートの粗粒砂 を多く含む。	灰黄褐色	内外面横ナデ。	二次的に火を受けている。
136	〃	肥前系 紅猪口	1.5	4.6		1.3	釉は白濁色	白色精緻	釉は内面全面と外面上半分にかかる。	
137	〃	土師器 土錘					チャートの細粒砂 を含む。	にぶい橙色	長さ3.9cm、最大径1.2cm、孔径0.5cm。	
138	〃	土師器 羽釜		25.2			チャートの粗粒砂 を多く含む。	橙色	断面三角形の鋸が巡る。口唇面取り。内外 面横ナデ。	

# 写真図版





調査前の状況（北から）



遺構完掘状況（北から）

PL. 2



ST1 遺物出土状況 (西から)



同上 (南から)





ST1 中央ピット検出面上の集石



ST1 完掘状況(西から)

PL. 4



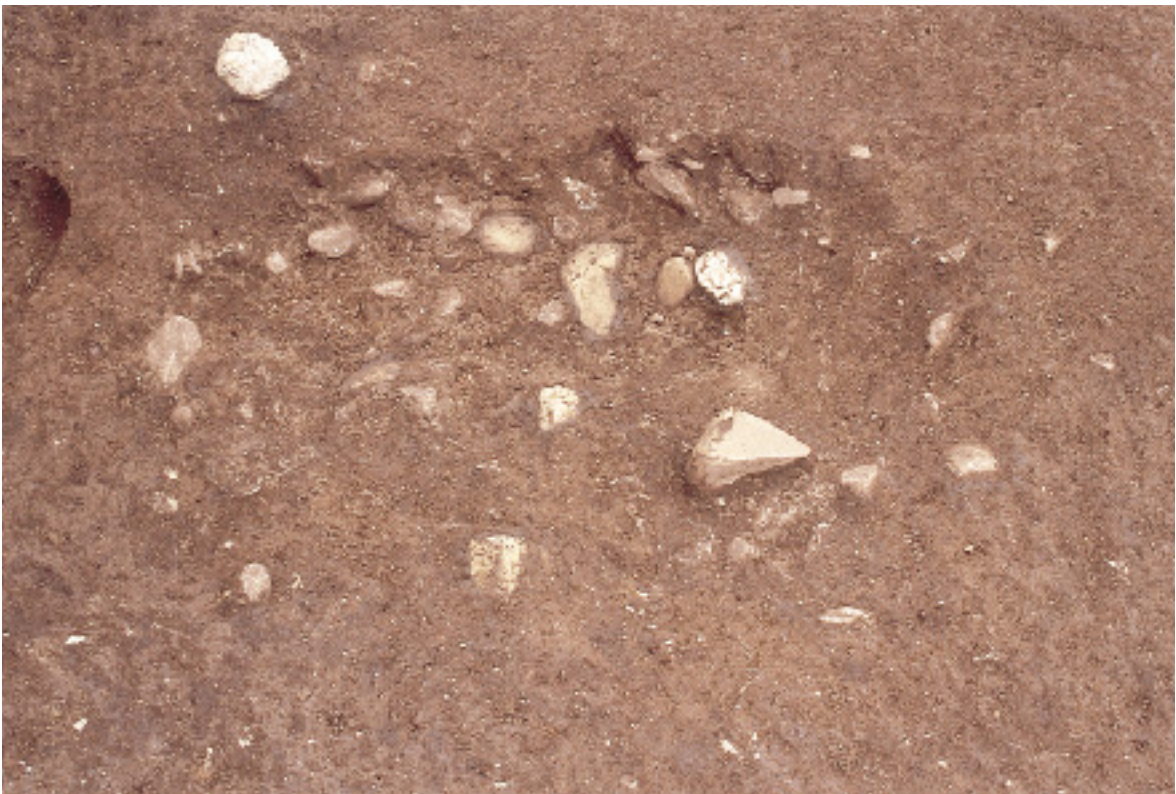
ST3 遺物出土状況 (東から)



同上 (南から)



ST3 完掘状況 (東から)



ST3 中央ピット



ST3 - P1 半截



同上 完掘



ST4 セクション



同上 集石(東から)



ST4 集石 (南から)



同上



ST4 集石 (南から)



ST4 完掘状況 (南から)



SK1 完掘状況 (南から)



SK4 (西から)





SK3 (西から)



SK7 (南から)



ST10 半截状況



同上 礫・炭化物出土状況



SK10 礫・炭化物出土状況



SK10 完掘状況



P6 遺物出土状況



調査区東壁セクション



ST4 床面出土土器 (64)



ST4 床面出土土器 (71)



SK10 炭化物 (板接合部)



SK10 六道銭



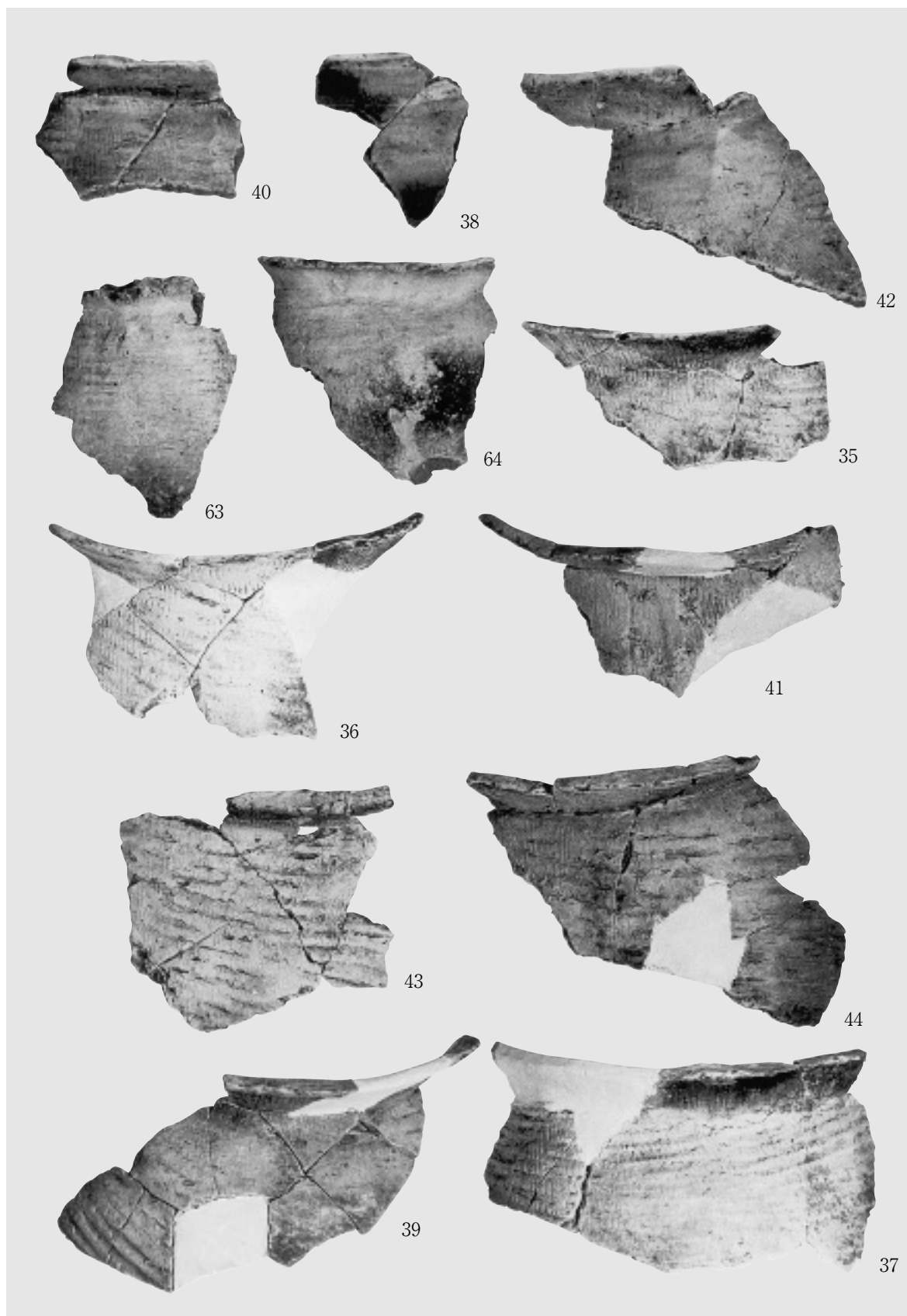
土師器小皿 (P108・98) 出土状況



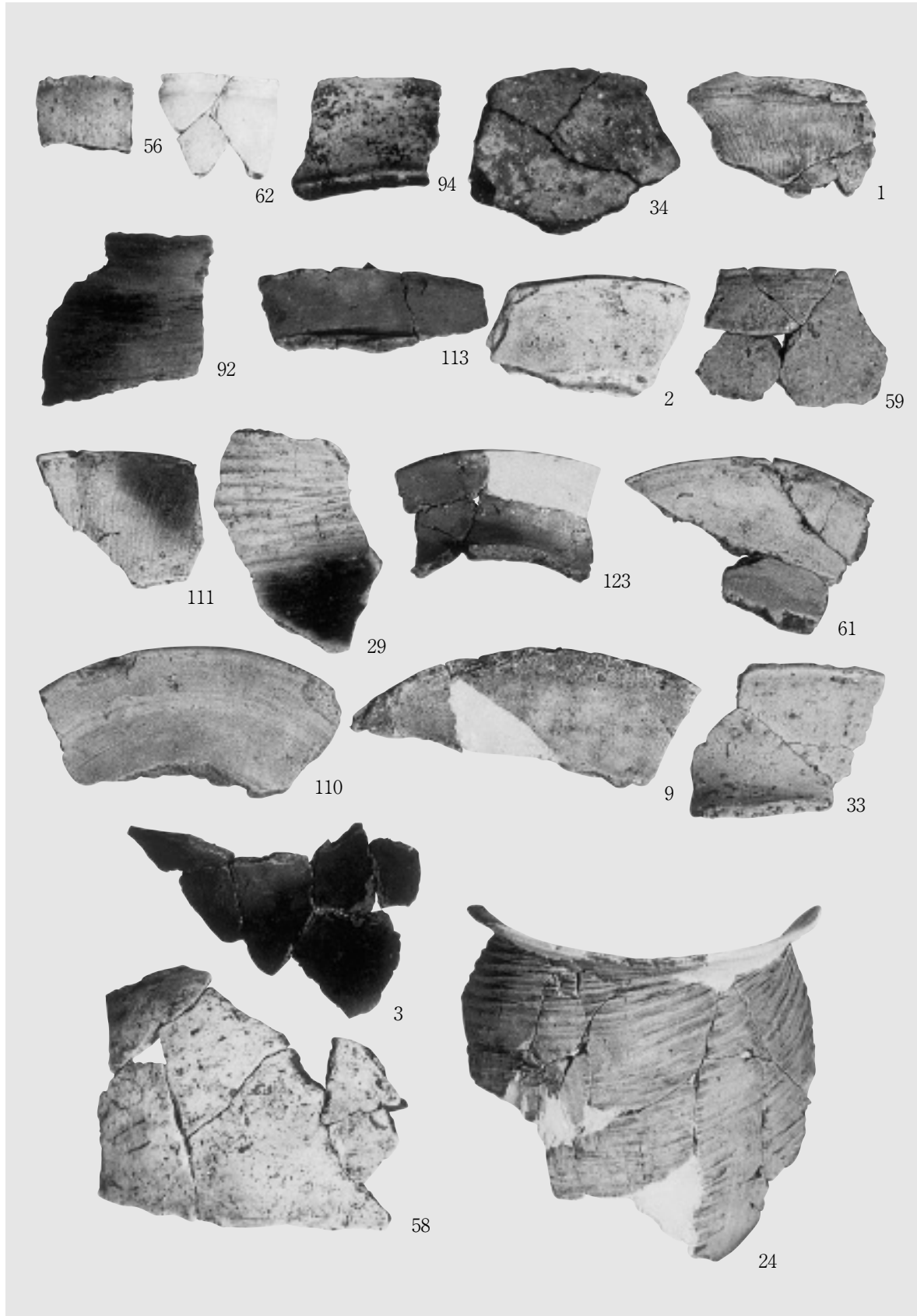
土師器碗出土状況 (P116・102)



豎穴住居址出土の土器

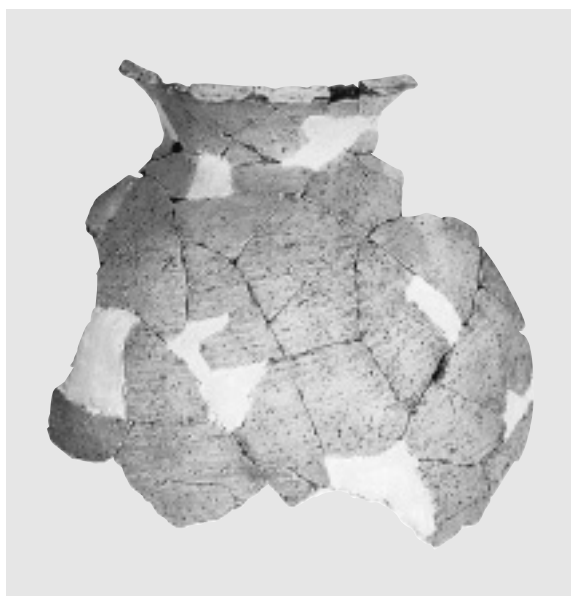


ST4 集石 (35~44)・床 (63・64) 出土土器



ST1 (1~3)、ST2 (9)、ST3 (24·29)、ST4 (33·34·56·58·59·61·62)、P6 (92·94)、包含層 (110·111·113·123) 出土土器

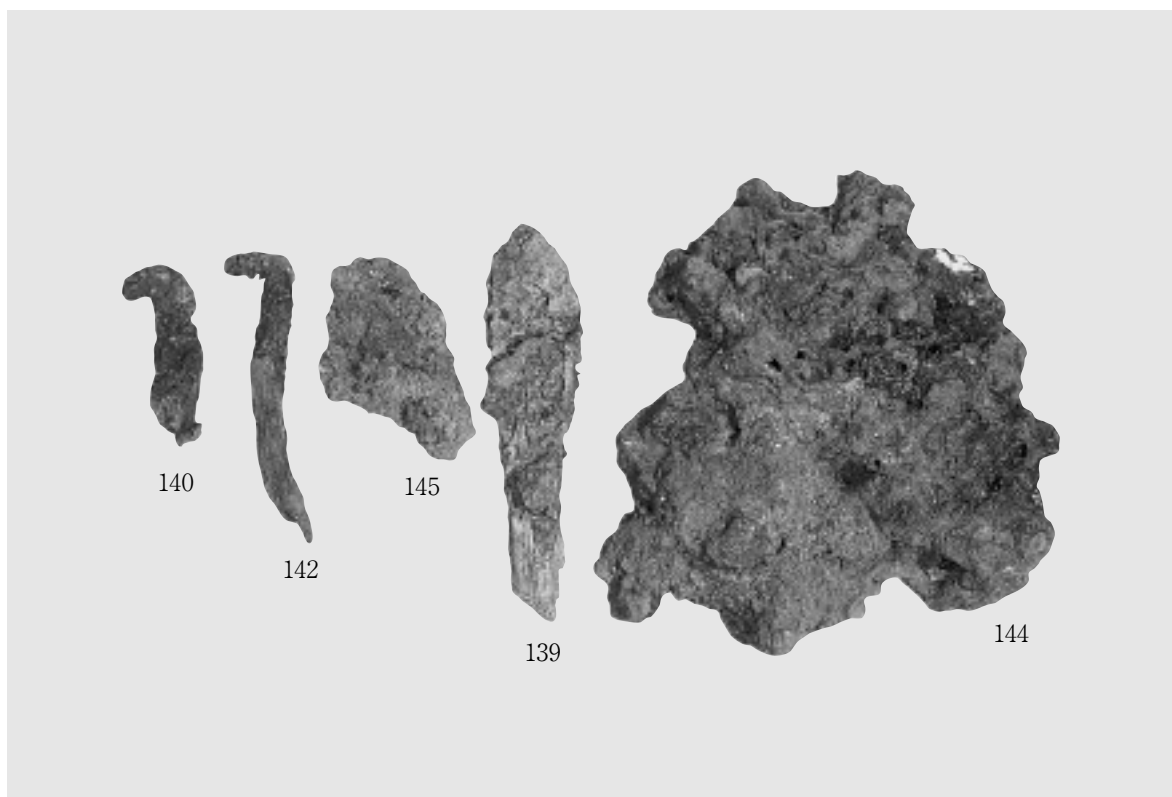




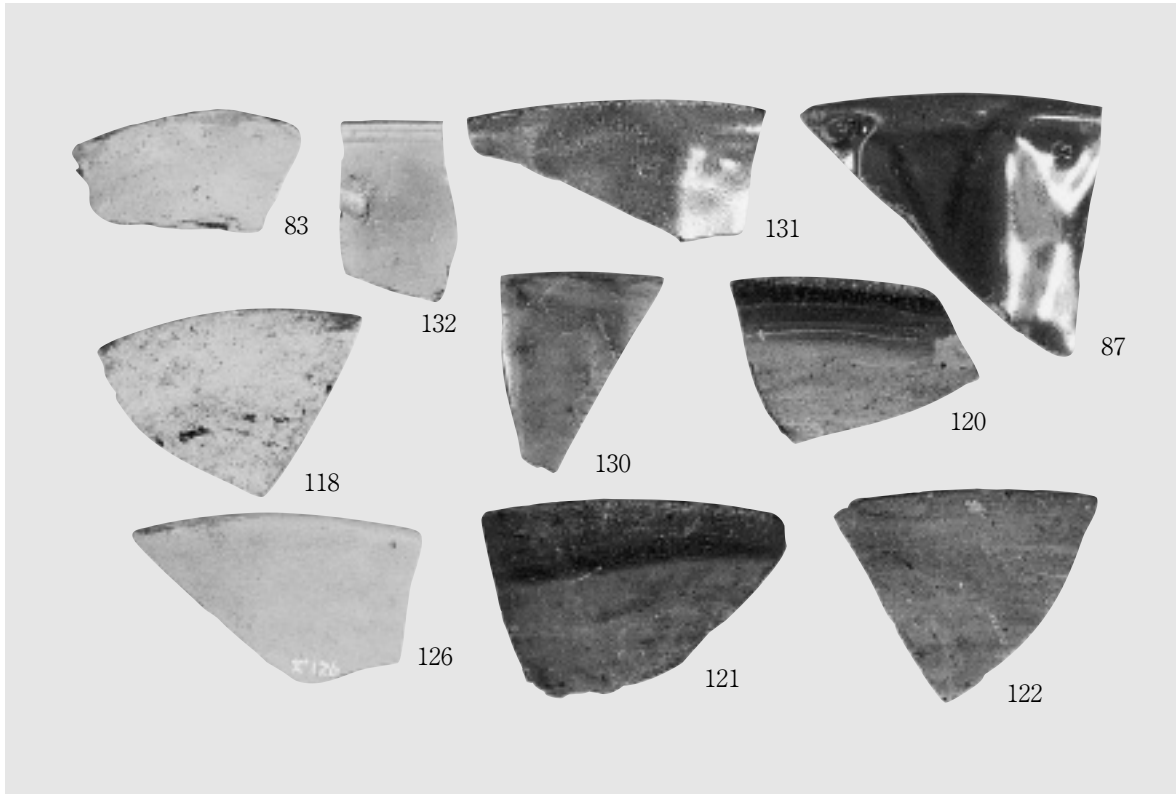
76 (ST4集石出土)



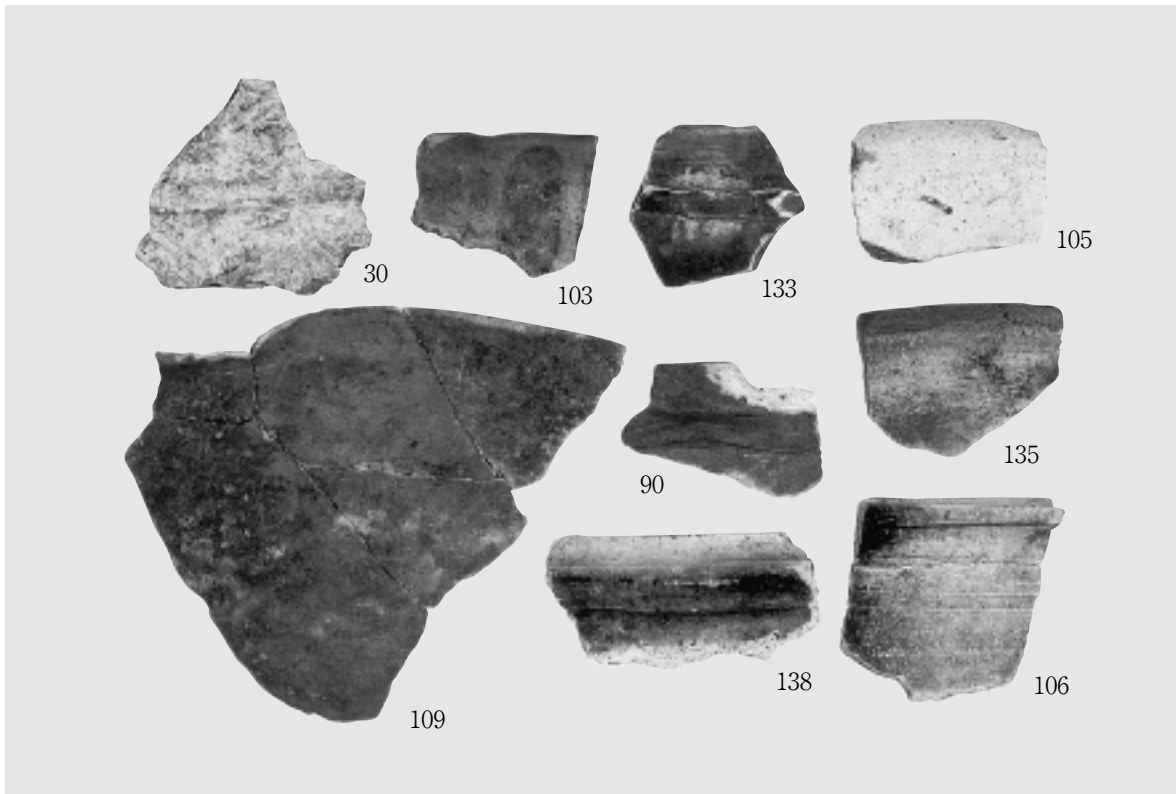
73 (ST4)



鉄器 ヤリガンナ:139 (SK1)、釘:140・142 (SK10)、鉄片:144 (ST4)・145 (P6)



古代・中世の土器（土師器坏：83・126、須恵器坏：120・121・122、須恵器蓋：118、青磁椀：87・131・132）



同上（須恵器壺：30、土師器甕：106・138、同鉢：105、瓦器鍋：90・103・133、同片口：109、東播系須恵器鉢：135）

報告書抄録

ふりがな	はやしだいせき							
書名	林田遺跡Ⅱ							
副書名	緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	出原恵三							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL.088-864-0671							
発行年月日	2002年10月7日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしだいせき 林田遺跡	こうちけん 高知県 とさやまだちょう 土佐山田町 はやしだかも 林田・加茂	39323	190181	33度 37分	133度 42分	2000年 7月26日 ) 9月16日	1,000	緊急地方道 整備事業に よる県道宮 ノ口深淵線 改良工事に 伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
林田遺跡	集落跡	弥生時代 後期	竪穴住居址 4棟 近代火葬墓 1基		弥生土器 鉄器			
<p>所見</p> <p>林田遺跡は、弥生後期から古墳時代前期初頭を中心とする集落遺跡で、今次調査では弥生後期末の竪穴住居址が4棟検出された。この内ST4からは竪穴住居の廃絶に伴う祭祀と考えられる集石や土器が多量に出土した。また近世墓坑SK10は、墓坑内で焼かれた特異な例である。</p>								

## 林田遺跡Ⅱ

---

2002年10月

発行 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社